

第9回
世田谷区子ども読書活動推進フォーラム

世田谷区立中央図書館

第9回世田谷区子ども読書活動推進フォーラムの報告

「子どもの本を語ろう！」

世田谷区立中央図書館と世田谷文学館が共催で、子どもの本をテーマに「第9回世田谷区子ども読書活動推進フォーラム」を開催しました。

このフォーラムは、日頃から子どもたちの読書活動推進の取り組みをされている方や関心のある方などに参加していただき、子どもの本の魅力を再認識し、子どもの読書環境づくりにいっそうの理解を深めていただくことを目的としています。

この報告紙は、フォーラムの第1部、第2部の内容をまとめたものです。当日参加することができなかった方にも、フォーラムの臨場感をお伝えできれば幸いです。今後の子どもの読書活動を推進するための参考資料としてご活用ください。

実施概要

- (1) 実施日時 平成27年2月7日(土) 13時30分～16時30分
- (2) 場 所 教育センター「ぎんが」
- (3) 参加人数 82人
- (4) 内 容 第1部 講演「子どもの本を語ろう！」
濱野京子(作家)
松田素子(編集者・作家)
兼森理恵(丸善・丸の内本店児童書担当)

第2部 意見交換会「子どもの本を語ろう！」

～書き手から、作り手から、売り手から

コーディネーター：生田美秋氏(世田谷文学館学芸部長)

パネリスト：濱野京子、松田素子、兼森理恵

目次

中央図書館長あいさつ	…P. 2
第1部講演	…P. 3
第2部意見交換会	…P. 23
(付録)	…P. 45

お問い合わせ先：

世田谷区立中央図書館 〒154-0016 世田谷区弦巻3-16-8 電話 3429-1811 F A X 3429-7436

世田谷文学館 〒157-0062 世田谷区南烏山1-10-10 電話 5374-9111 F A X 5374-9120

第9回世田谷区子ども読書活動推進フォーラムの開催にあたって

中央図書館長 花房千里

皆さま、こんにちは。中央図書館の花房（はなふさ）と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日はお忙しい中、フォーラムにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

このフォーラムは、子どもの本に関わる方に集まっていただきまして、意見交換を行ったり、子どもの本のすばらしさを再認識したり、子どもたちのこれからの読書環境を進めていこうということで、開催させていただいております。今回で9回目になります。日頃から図書館運営に、ご協力いただいている方も今日はたくさんお見えだと思いますので、この場をお借りして御礼を申し上げます。ありがとうございます。

さて、図書館では11月1日から貸出冊数を5冊から15冊に変更いたしました。中でも特に子どもの絵本とか児童書が非常にたくさん借りられるようになりました。とてもすばらしいことで良かったと思っております。また、現在、第2次世田谷区立図書館ビジョンを作成しております。子ども読書活動推進計画が今度3次になると思うのですが、そちらを第2次図書館ビジョンの中の施策に取り込みまして、合わせて10年計画に取り組んでいくということでございます。子どもたちが、ひとりでも多く本を好きになっていただくような環境づくりをめざして、図書館でもがんばってまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、本日はすけれども、2部構成になっております。第1部は「子どもの本を語ろう」ということで、作家の濱野京子さん、それから編集者の松田素子さん、最後に書店員の兼森理恵さんの3人をお招きしております。お忙しい中、本当にご活躍のお三方にお越しいただきましてありがとうございます。第2部は、世田谷文学館の生田学芸部長にコーディネーターをしていただきまして、3人の講師の方に意見交換を行っていただきたいと思っております。子どもの本の魅力が見出せるような、とてもいいお話を伺えると思っておりますので、皆様方も、最後までお楽しみいただきたいと思っております。今日はありがとうございました。

<第1部 講演会 「子どもの本を語ろう！」>

講師 はまのきょうこ
濱野京子（作家）

1999年、毎日児童小説コンクール優秀賞。2002年、最優秀賞。2006年『天下無敵のお嬢様！（1）けやき御殿のメリーさん』（童心社）でデビュー。2009年『フュージョン』（講談社）でJBBY賞、2010年に『トーキョー・クロスロード』（ポプラ社）で坪田譲治文学賞。ほかに、『木工少女』（講談社）など児童文学の著書多数。

皆さんこんにちは、濱野です。ちょっと今緊張しています。私は運動が苦手でいつも運動会が憂鬱だったんですよね。人前で語るのも苦手なだけけれど、でも、少しだけうきうきする気分になるということで、人前で話すときには、いつでも運動会の日みたいだなと思います。

今日いらしているのは区内の方ですか、皆さん。世田谷区以外から来た方・・・何名かいますね。ありがとうございます。でも区内の方がほとんどですね。特に意味ないですが（笑）。

まず簡単な自己紹介からさせていただきます。私は熊本で生まれて東京で育ちました。0歳から東京なので、熊本出身というのはちょっと違うかなと思って、いつもプロフィールには、あえて熊本生まれの東京育ちと入れています。育ったのは東京都、世田谷とは反対の北のほうの板橋区というところで、二つ先の駅はもう埼玉県です。現在は、さいたま市に住んでいます。ちなみに、さいたま市の図書館は本といろんなもの合わせて30点借りられます（笑）。それで世田谷区というところとちょっと離れていてあまり縁がないだけけれども、実はうんと年の離れた従兄がいて、昔、世田谷の鎌田というところに住んでいたの、小さい頃、よく遊びに行っていたんですよね。そのころ、東急多摩川線という電車がありまして、その路面電車に乗って二子玉川まで行って、そこからさらに支線の砧線という電車に乗りかえます。その砧線の線路沿いに従兄弟のうちがありました。すぐ裏が多摩川の土手という、そんなロケーションでした。

私の家は、あまり裕福ではなかったの、はっきりいって貧しくて、本なども買ってもらえませんでした。ただ、今話しました従兄がですね、本に関係する仕事をしていたみたいで、「小学1年生」ですとか「2年生」ですとか、あと、「中1時代」とか「中2時代」といった雑誌を毎月私たちきょうだいに、何年にもわたって送ってくれたんです。その手の雑誌には読み物だったり、特集ページがあったり、それから漫画も入っていたりしていた。そういったものによって、読む力を少しずつ鍛えていったと思います。

初めて物語を書いたのは小学校6年生の時でした。中学校と高校のときにも小説を細々と書いていたんですけども、20代や30代は書きたいって気持ちは持ってましたけれども、仕事とか勉強とか忙しくなってしまう。

いい忘れましたが、本はあまり買っては貰えなかったけれども、学校のすぐ隣に図書館があり

ました。何十年も前のことなので、そのころ板橋区には図書館が区内に2つしかなかったんです。今はたぶん10以上あると思うんですね。二つのうちの 하나가、学校のすぐ隣にあったので、しょっちゅう行っていました。

その赤塚図書館という小さな図書館について、クイズを出したいと思います。当時の図書館についてのクイズですが、つぎのうち本当のことはどれでしょう。

1) 靴を脱いで入る、2) その図書館は、図書館なのに薄暗い(笑)、3) その図書館は漫画雑誌があった。以上3つの内ほんとのことはどれだと思いますか。今日は、代表して兼森さんに答えていただきましょうか(笑)。靴を脱ぐか、薄暗いか、漫画雑誌があったか。(兼森氏:「3漫画がある。」)はい当りです。今の全部あたりです(笑)。建物の中に入って行くと玄関があってそこで靴を脱いで上がって、真ん中にドーンと階段があって上のほうに行くと貸出手続きをしてくれる年配の女性の図書館員の方が座っていました。なんか薄暗くて本も古いし、なぜか漫画雑誌があって、私、あのデビューしたてだった里中満智子さん作品とかね、読んだ記憶がありません。

それはまあ置いといて、私は2006年にデビューしまして、3年前に、25年間働いていた小さな会社を辞めまして、今は一応専業作家ということになっています。肩書きは会社員とは言えなくなったので、児童文学作家と言っているんですけども、その児童文学作家っていうのは難しいっていうか、ちょっと堅苦しいっていいですか、たぶん一般的には童話作家というほうがぴんとくるでしょう。でも、私は、童話作家という風に自分で言ったことはありません。多分子どもの本っていう風に言ったときに、まず相手の方が連想されるのはまず絵本なんじゃないかなって思います。そのつぎは、童話ですね。私、いちいち注釈をているんです。「子どもの本と言いましても、どちらかという、中学生ですとか、高校生むけのものを中心に書いていまして」とか何とかね。

児童文学というのは、一部の方は別でしょうけれども、あまりお金にならない仕事です。少子化なんかも進んでいまして、今本が売れません。

かつて出版は、本は漫画しか売れないって言われた時代があったんですね。でもそのうち漫画も売れないって言われるようになって、あと、何とか雑誌でもっていると言われていたら、雑誌も売れないと言われていきますね。雑誌離れが進んでいる。つい最近聞いた話では、特に若者の雑誌離れが進んでいると。それはなぜかといいますと、もちろんネットの普及とかもあるのでしょうけれども、今の若い世代の人たちは、発売日を待つという原体験がない、考えてみますと、ネットの普及などもあって、私たちは待つということをしなくなってきたな、なんて思っています。

じゃあ児童書の状況はというと、かつては絵本しか売れないと言われた。今は絵本もなかなか厳しい。本っていうのは文化を育む上でとても大事なものなので、たぶん今日いらっしゃった皆さんは本が好きなんだと思うんですが、ぜひ本を買ってください。できれば私の本も買ってください(笑)。

絵本のことは良くわからないんですが、今日は後ほど、絵本に関わっている方がお話しして下さるんで。私も、一生のうちに1冊か2冊、絵本が出せればうれしいなという気がしていますが、

まあ遠い夢かな。基本的には長い文章を書くのが好きなので。

絵本について、面白い話を、ちょっと紹介したいと思います。子どもの本として人気の絵本、優れたロングセラーがたくさんあることが大前提ではあるんですけども、ある時アーサー・ピナードさんが、講演でこんなことを言ったんです。東日本大震災の後、被災地の子どもたちに絵本を贈る活動がさかんに行われました。アーサーさんは、「なぜ絵本だったのでしょうか」と問いかけたんで



すね。それから、こんなことを言っていた。「それは無難だったからじゃないか」と。私も無理解を曝け出すんですけども、病院に入院しているお友達の見舞いに、絵本を持って行ったりとか、あまり親しくない知り合いの結婚のお祝いに絵本を差し上げたりしたことがあります。やっぱりどこかで無難ということを選んでしまっていたのかもしれない。さらにアーサーさんは「無難でいいのか」と問いかけている。もちろん無難なんて言葉で片付けられないすばらしい絵本もたくさんあると思いますが、やっぱり絵本を書かれる方もこれはどこかで考え続けてゆく必要があるのではないかと感じました。

これからは児童文学について話したいと思います。児童文学と聞いてイメージするものはどんなことでしょうか。かなり幅が広い。児童という言葉は、通常は小学生をさしますよね。でも児童文学の対象年齢は、学齢前の子どもから中学生高校生ぐらいまで含みます。ちなみに、私がどういうものを書いてきたかと言いますと、先程もご紹介していただきましたように、自分の本の中で8割ぐらいが現代の日本を舞台にした物語です。年齢は、10歳から18歳位までを対象に書いています。たぶん一番多いのは中学生ですかね。ですので、いわゆるYA、ヤングアダルトです。YAと聞いてピンとこない方いらっしゃるのでしょうか。ただこのYAという言葉はどう考えるかということに関しては、かえって読者層を限定してしまうんじゃないかという声もあります。YAを普及させようと熱心に活動されている方もいらっしゃるのでは何とも言えないんですけども。私自身、実は語感的にあまり好きじゃない言葉です。年齢ということだけではなくて、ジャンルももちろんいろいろあります。リアリズム、ミステリー、SF等、大人の本といっしょです。官能小説というのはないでしょうけれど(笑)。エンタメ性の強いものから文学作品までね。

児童文学の中にも、ノンフィクションというジャンルがあります。私は一般書のノンフィクションはとても好きなんです。歴史物とか社会科学とかがとても好きでよく読むんですけども。ノンフィクションとフィクション - 物語との違いは何なのだろうか。簡単に答えられないのですが。

それから、戦争だとか貧困だとか、社会問題を扱ったジャンルがあります。やっぱりそういうものにチャレンジしたい気持ちはあるんですけども、やっぱり戦争体験はないですし、事実の

前に太刀打ちできそうもない。でも、もし物語を求められるとしたら、物語にできることがあるとしたら、それは何なのか……そんなことを考えています。すんなりと答えは見つかりませんが。

現代児童文学が曲がり角に来ているという風におっしゃる方がいます。現代文学の終焉という言葉が使われる方もいます。私はもちろん研究者でもありませんし、児童文学の歴史そのものに詳しいわけではありませんので、まあ今後の展望について見解があるわけではありませんけれども、ちょっとざっくり振り返ってみます。

現代児童文学は、1959年に始まったという風に言われています。佐藤さとるさんの『だれも知らない小さな国』や、いぬいとみこさんの『木かげの家の小人たち』がでた頃ですね。1960年代に当時20代30代だった人たちが時代を担ってきます。松谷みよ子さんですとか神沢利子さん、古田足日さんとか。あと山中恒さん。1980年頃になって転換期を迎えます。児童文学というのは向日性というか、日に向かうですね、理想主義的なものがメインという考え方だったんですけれども、例えば家庭崩壊ですとか性の問題とかそういうテーマの翻訳本なんかで紹介されるようになって、少しずつ幅が広がってきた。一方で、那須正幹さん、ズッコケシリーズに代表されるエンタメ色の強いものとか出てきました。また同じ頃、描写性の強い作品でいうんですか、小説的なもの、岩瀬成子さんやさとうまき子さんとか、ですね。そして90年代になってくるとボーダレスといわれる作品が生まれます。その代表的なものとしては、何といてもあさのあつこさんの『バッテリー』かなと。児童書で出発した森絵都さんが直木賞を受賞したりですとか、例えばですね、重松清さんとか石田衣良さんのある種の作品というのはYAと言ってもおかしくないんじゃないでしょうか。

本屋さんに行って一番勢いあるなと感じるものは児童文庫かなという風に思います。文庫には、いわゆる名作、海外の名作なんかたくさん入っているんですけども、やっぱり目につくものはエンタメの色彩が強いものです。自分がほしいと思う本を自分のお小遣いで買えるということは、とても大事なことだと思います。でも、その一方でやっぱり子どもの本には、大人の手を経て渡される本というのも必要なのになって風に感じます。

本は売れないって言われてますけれども、今後どうなっていくのかなあと、電子ブックのことなんかもあるし。でもね、何とか子どもの本を盛り上げたいと思いますので、これからも編集者とか本屋さんとか、協力して盛り上げていけたらいいなあとという風に思います。児童文学というものが終焉であろうとなかろうと、目下私は、児童文学ファンというところでごはんを食べていきますので。

少し、自分がなぜこのジャンルで書いてきたのかを話したいと思います。私は実は、児童文学作家になりたいとか童話作家になりたいとか、そんな風に思ったことはありませんでした。児童書でデビューして児童文学作家やっているのも、まあ成り行き、たまたま自分が書いたものが児童書の中で受け入れられたというのが正直なところじゃないかと思います。でも、この世界、私にとっては意外と居心地がよかったです。なぜかというとならやっぱり子どもの本って理想が語れる分野ですから。希望が語れるということ、私は自分の中でかなり重要視しているので、ご都合的なものってなかなか書けないけれど、そうでない形で希望を語ることは、児童文学の役割の

一つかなって考えています。

書き手として意識していることは、いつも直接的に書いている訳なんじゃないんですけどもね。例えば、人間というのはやり直しができるんだ、ということ。それから大人になるのを怖がらないでほしい、ということ。私はとても臆病な子どもで、大人になってちゃんと仕事につけるのかなとかすごく不安でした。でも、そんな私でも何とか大人をやっています。それと、多様性の提示というんですかね。



違った角度でみてこんなこともあるよ、こんな生き方もあるよみたいなことを示せたら、と思います。風景が違って見えたりとか、ちょっとだけ違った世界を提示できたらいいなと、よどんだ空気にちょっと風が吹き抜けるっていいですか、そんな風なことができればいいなと感じています。

たぶん皆さん本が好きだと思いますが、私も一応本が好きということになっているんですけども、あんまり読書家ではありません。読書家ではないけれども文字中毒っばいかなって。時々ブログなんかで、ブロガーが自称活字中毒とか書いてますよね。で、どういう本を読んでいるのかなという、物語だけだったり。この人は、物語が好きなんであって活字中毒というのとはちょっと違うんじゃないかと。活字中毒って、皆さんの中にもいらっしゃるかもしれませんけれども、例えば満員電車の中で本が読めない時、片っ端から吊り広告を読む、とにかく文字を探す。私は文字がだらだら出てくる夢を見たりします（笑）。でもまあ、確かにそれほど読書家でなかったので、世界の名著とか、沢山読んできたということはないです。それでもやっぱり、本に支えられてきたなど。この一冊、自分の人生にとってこの一冊っていう出会いはないです。でも本を読んでこなかったらこうして書いていることもなかったでしょう。

読むことでできたもの、これって後半の話にも繋がってくると思うんですけども、自分のことと言いますと、本を読むことでまず、文字、言葉を覚えた。それからリテラシーを鍛えられた。

読むこともおもしろいが、書くこともおもしろい。物語を書いていらっしゃる方、ここにいらっしゃいますか。えーっとですね、よくね、とって本を読んでいるんだけど、「なんか書きませんか」って言うとなら、「えーっ、私にはとても書けませんよ」って人がいますが、これってどういうことなんだろうって。

私が20代のころに聞いたちょっと素敵なエピソードなのですが、昔、識字学級に通っていたおばあさんがの話です。いろんな事情で子どもの時、文字を覚えるチャンスがなかった人が、大人になってから字を習って、そのおばあさんが作文を書いた。「字が書けなかったときは夕焼けがきれいだと思ったりしなかった、けれども字を覚えてから夕焼けがきれいに感じるようになった。」これどういうことでしょうか。表現しようと思っていると、物の見方も変わってくるのではないかという気がしています。「書いてみたいけど、書けないわ」って思っている人はぜひ書いてみてください。本の読み方もちょっとかわってくるかもしれませんね。年を取ってからでも

書けます。例えばあの、フィギュアスケートとかバイオリンとか、そういったことは年取ってから始めたらなかなか難しいと思うんですけど、お話を書くのは年取ってから始めてもできる。うまくなることもできます。ぜひ書いてみてください。

これは後半の意見交換のときの前ふり的なことなんですけれども、さきほどリテラシーを鍛えるといいましたけれども、リテラシーということの他に、自分が本を読むことを通じて社会だとか世の中、それから人間についての基本的な信頼みたいなものを、学んできたと思うんですよ。これもいろいろ意見があるかもしれませんが、ある意味で勸善懲惡的というか、そういう物語があってもいいのかなあという気がしています。それとやっぱり低学年のうちは、正しいこととか、努力が報われるということを大事にしてほしいなという気がします。ただしこれも難しくって努力も才能っていうようないい方がありますよね。努力できない人もいます。そういう人が生き辛い世の中というのもそれもまた違う。それから、高学年になると、物語の中で、ある種の理不尽さに出会うことも必要なのではないかと、思います。

子どもたちが本読む環境というのを整えるっていうのは大人の役割だと思います。新年に、児童文学作家の大先輩である丘修三さんが、あるイベントの時に、こんなことをおっしゃった。子どもが本を読むのに必要なことは、「平和であること」「貧困でないこと」。

この言葉を紹介して、私の前半の話を終えたいと思います。

講師

まつだもとこ
松田素子（編集者・作家）

偕成社に入社後「月刊MOE」の創刊メンバーとなり、同誌の編集長を務めた。その後フリーとなり、絵本を中心とした企画・編集を手掛けるかたわら、『ホネホネたんけんたい』（アリス館）等、サイエンスや自然の分野の子どもの本を執筆。また各地のワークショップに参加し、新しい作家の育成に努めている。

こんにちは。松田素子です。濱野さんのお話を聞きながら、じゃあ私もその話からしようと決めました。私がなぜここに立っているのか……。それは、いまの私と、そしてこれから自分がどうしていこうかということと深くつながってまいりますので、なぜ私がいまここに立っているのか、まずはそれを話します。

私は山口県の瀬戸内の小さな田舎で育ちました。歩いていけるところには、いわゆる本屋というものが一軒もありませんでした。そしていまありません。かろうじて少しだけ本や雑誌が置いてあるバス停みたいな店はありました。習字の硯とか縄跳びとか文房具とか全部一緒に売っているような、そういう小さな店が一軒きり。そういう所で育って、18歳の終わりに東京に来たわけです。もうびっくりしましたね。世の中にこんなに本があったのかと。そんなわけですから、私は結局、いまここで私たちが「絵本」と呼んでいる、そんな本には一冊も出会わないまま大人になってしまったというわけです。私が「絵本」というものをはっきり認識したのは21歳のときです。私は1955年生まれなんですが、その時代というのは、ちょうど福音館が「こどものとも」を出し始めたり、岩波書店が世界の色々な素敵な絵本を翻訳して出し始めたころにあたります。ですからもし私が東京で育っていれば、子ども時代にそういうものを手に取るチャンスがあったかもしれません。でも本屋のない田舎で育って、情報もいまほどありませんから、私にはそのチャンスはおとずれなかったんです。でも結果的にいえば、それが私をいまここに立たせている要因ではないかと実は思っているんです。なぜかというのは後から話しますが、というわけで私は大変なコンプレックスの塊として19、20歳をすごしていました。どうしたらいいんだろうと思っていた。大学の級友たちの話についていけなかった。みんな難しそうな話をしているわけです。吉本隆明の書いた『言語にとって美とはなにか』を読んだか？とか、あれはどうだこうだっという感じで……。私はそんな本を読んだこともないし、その名前すら知らなかった。

それで大学の生協に行って、みんながしゃべっている吉本隆明なる人の本を一冊ぐらい読んだほうが良からうかと思って書棚を眺めるんだけど、いっぱい並んでいてどれを買っていいかもわからない。ポーっとしていると、そこにやって来た同級生が「なにしてるの？」って言うから、もう正直に言いました、「みんなの話にまったくついていけないんだ」と。「何か読んだほうがいいと思ったんだけど、どれ買っていいかもわからない」と言ったら、その子が一瞬黙った後に、「いいんだよ、みんなだってそんなにわかっているわけじゃないんだから。松田さんはときどき子どもの頃に読んだ本の話をするでしょ、みんなはそっちを忘れてたりするからおあいこだ

よ」って言ってくれた。本好きではありましたから、絵本ではないけれど、読んではいたんです。たとえば読書感想文コンクールというのがありますよね。あれは私が生まれたころに始まったもので、課題図書となると、私の田舎の学校の図書館にもそういう本がやってくるんですよ。『エルマーのぼうけん』とか。あの本は、おかげで小学校三年の時に読みました。そういう本のことをときどき話してなんとか切り抜けていたんです。同級生のなぐさめの言葉もあって、結局私は吉本隆明を一冊も買わないまま大学時代を過ごしてしまった（笑）。

そのかわりでもありませんけれど、私はその時代に「絵本」に出会ったんです。21歳の時でした。どういう出会いだったかを話します。当時、自分の故郷に帰るのには10時間も電車に乗っていきなかつたんですが、帰省するために家を出たその日、たまたま本を持って出るのを忘れたんですね。そういうときは必ず本を持って出るわけですけど、忘れちゃって、「あ、いけない。文庫本でも買わなきゃ」と思って、駅前で本屋に寄ることにしたわけです。で、そのとき、ふっと、もうひとつのことを思ったんです。「あっちに、まだ行ったことのない本屋さんがあったな...」って。それが私の運命の分かれ道です。そこへ行きました。でも、その本屋に入ったとたんに「しまった」と思った。文庫本が見当たらない。あとで気づくんですが、そこは子どもの本の専門店だったんです。当時、そういうお店ができた時期で、そこはそのひとつ、西荻窪にあったハッピーオールというお店でした。電車の時間がありましたから、もう他のお店にまわる余裕はなくて、仕方なく、目の前に積んであった本を買いました。中も見ずに、ただ高く積んであったからというだけで買っちゃった。それが、一冊の「絵本」だったんです。

.....どうしてそんなことをしたのかと、あとから聞かれても、理由は説明できないような出来事って、おそらく皆さんにも一度や二度はあると思うんですが、私にとってはまさにその瞬間がそれでした。なぜそれを買ったのか、いまだにわかりません。電車に乗ってから後悔しました。だって10時間もあるのに、こんな薄っぺらいのを買ってしまったんですからね。あ～あ、こんな10分で終わっちゃう.....。しょうがないや、あとは寝ていようと思って読み始めた。そしてそのあと、私は、ものすごい衝撃を受けることになるんです。「世の中にこんなものがあったのか.....」と思った。しかも、その作者が私と同年だった。こんな話をすると「その絵本は何ですか？」って必ず聞かれますから、そのとき買った本を今日は持ってきました。これです。カバーなんて、かなりぼろぼろになっちゃいましたけど.....。『はせがわくんきらいや』という絵本でした。これが私にとっての絵本事始です。内容は、ご存知の方に説明する必要はないですけど、昭和30年に森永ヒ素ミルク中毒事件というのがあり、それが背景になった絵本です。私もその年に生まれたわけですが、ほんとうに胸をつかまれました。はせがわくんの友達である男の子が「はせがわくんなんか だいきらい だいきらい」と言いながらはせがわくんのそばを離れない。「だいきらい」と言いながら、はせがわくんをおんぶしている。テーマも衝撃的でしたけれど、それ以上に、世の中にこんな表現方法があったんだということに、私はものすごい衝撃を受けた。「絵本」というものを発見したんです。衝撃を受けると同時に「私は一生、これー絵本とよばれているものを読もう」と心に決めました。まさかそれが仕事になるという考えは当時はまったくありませんでしたけどね。そしてちょうど同じ時期に、もうひとつの出会いが重なっ

たんです。それは宮沢賢治。当時、目標も自信もなく過ごしていた私は、ある日一人で部室にいて、ぼんやりしていたんです。そこへ先輩が入ってきて「なにしてんだ？」と聞くから「いや、別に」と言ったら「やれやれ」って顔されて、「しょうがないな、おまえは」と言って、パチンコの景品の入った紙袋からチョコレートを一箱くれたんです。で、出て行ったんだけど、また戻ってきて「これも、読んだから、やるわ」って、ジープのポケットからよれよれになった文庫本を出して、私の前にぼんと置いたんです。まるで映画みたいでしょ、でも、ほんとの話です。それが、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』だった。実は私はその時まで「銀河鉄道の夜」を読み通したことがなかったんです、恥ずかしい話。で、チョコレートもあるし、暇だし、「読もうかな...」と思って読み始めました。読み終わったとき、すぐに言葉化できない不思議な魅力を感じたわけですが、実は、私にとってのほんとうの衝撃は、読み終わったこの瞬間ではなかったんですよね。さっき濱野さんがおもしろいことをおっしゃっていました。「字を覚えたら夕焼けがきれいに見えるようになった」とー。それとも一脈通じる話かもしれませんが、読み終わった後に部室の外に出たその時に、「えっ？」と思った。世界がまるで塗りかわって見えたんです。それまで私は、木に葉っぱがついていることは確かに知っていました。でも、葉っぱが一枚一枚ついていて、一枚一枚が揺れているのであるという、そんな当たり前のことが、その時、はっきりとわかったし、目に見えたんです。雲が空に浮かんでいることも知っていましたが、あ、雲がたったいま、あんなふう動いているというふうに、自分の中から言葉が、表現が、出てきたんですね。ものすごくうれしかったです。なぜなら、当時の私は、高校の時まではそんな子ではなかったんですけど、とにかくうまくしゃべれない、自分の言葉が出てこないという非常によくない状況に陥っていた。人が言った賢そうな言葉を覚えて、それを自分で考えたかのように人に言うという「人間コピー機」みたいになっていて、もう最低だったんです。私はもうこのまま自分でものを考えることができなくなるんじゃないか、言葉も持っていないんじゃないかというふうに、どんどんどんどん自分を、ダメダメ、ペケペケだと思いつめていた時期だったので、そのとき、雲を見て「あ、いま、雲があんなふう動いている」という、あんなふうというところには何かしらそのときの比喩や表現が入っていたわけですが、つまり借り物ではなく、自分自身の中から出てきた言葉というか、表現があった。そのとき思いました。「私は自分で自分の心に掛け金をはめてたのかもしれない」って。なにか賢そうな言葉を言わなくてはいけないと思い込んでいた。でも、賢治を読んだ後に、何かが変わったんです。宮沢賢治の文章は、なんというか.....とても体感的なんです。たとえば「山がそびえていました」という文章があるとしたら、同じような状況を宮沢賢治は「山はうるうると青くもりあがり」って書きちゃったりする。これは「どんぐりと山猫」に出てくる表現です。胸が「どきどき」しましたと私たちはよく言いますね。賢治は胸が「どかどか」しましたと書く。「どかどか」というと、本当に体にくる。脳では



なく、理屈ではなく、体の細胞そのものが感じるような文章なんです。その文章がもっていた不思議な力のせいでしょうか、とにかく、私のものの見方というか、何か深いところを賢治の文章がゆさぶったんです。そして思いました。これが「童話」とよばれているものなのか……と。「絵本」といわれているものと「童話」といわれているもの　ほとんど同じ時期に、その衝撃を味わった。誰かの全集というのを手にいれたのも賢治だけです。つまり、こうした出来事が、いま、私をここに立たせているというわけです。それともうひとつ、とても重要だったのは、私がおそのとき、困っていたことだと思うんです。なんの自信もなく、大変困っていた。困っていたからこそ出会ったものがものすごく沁み込んだんだと思うんです。もし困っていなかったら「ふうん」くらいで終わっちゃったかもしれない。でも当時の私は藁をもつかむ思いでしたからね。なにがここにあると感じて、もう必死でつかんだんですね。そういう経験があるものですから、私は、子どもが本を「読まなければならない」とは、実は思っていない。はい、正直に言いますと実は思っていない。そういうふうになんか思っちゃうと、ある意味、危険でさえあると思っています。そう思い込むことは強迫観念になったり、なにかを短絡的にしてしまう危険もはらむのではないかと考えています。これについては後からゆっくり説明する必要があるかとは思いますが……。

とはいえ、私という個人は、さっきも言いましたけれど、本というものが好きな子どもでした。ただ面白いから読んだというだけでなく、自分の心の危機がおとずれた時も私は本をつかんでいました。最初の危機は、13歳の時で、別にいじめられたわけでも何でもなかったんですけど、なんというか、自分が存在していること自体に困っていた。なぜ自分がここにいるのか。なぜ生きていなければならないのか。なんか10代ってそういう時期なんですね。学校では普通に明るく楽しくしているんですけども、だんだん13・14歳くらいになると自分で自分をコントロールできない、そういう時期に私も入ってしまっていて、大人からすると、とても扱いにくい子だったと思います。とにかく自分が生きている理由がほしい。何かはっきりした目的が欲しい。で、私は本に手をのばした。そのころの我が家には、階段の途中とか、適当に本棚があって、父が読んでいた本も子どもの本もぐちゃぐちゃに入っていたんです。それも私にはラッキーだったかもしれない。そういう中から自分の疑問に答えてくれそうなものを片っ端から引っ張り出しました。難しい本、たとえば三木清の『人生論ノート』とか、わかるわけないけど、タイトルにひかれて手を出しましたね。ロマン・ロランの『魅せられたる魂』とか倉田百三の『出家とその弟子』とか、トルストイの『光あるうち光のなかを歩め』とか、わからないくせに片っ端から開いた。そしてある一冊の本を読んだところで、区切りがついた。そのときの衝撃はやっぱり忘れません。13歳の終わりくらいかな。中1だったんですけど。それを読み終わった後にベッドの上でぼろぼろぼろ涙がこぼれた。それは『老人と海』でした、ヘミングウェイの。なぜそれに手を出したかということ、薄かったから。薄い文庫本だから、すぐ読めると思ったからです。老人が一人で漁に出るわけです。そこですごく大きな魚を捕まえるんです。その死闘が海の中でくりひろげられる。そしてようやく老人は魚をしとめる。そして港に帰るわけですが、せっかくしとめた魚は港についたときにはかげも形もない、港に帰るまでに他の魚に食われちゃったんですね。ですから、結果が目に見えないんです。でも私は、その過程を読んで知っているわけです。このこと

に、私は深くゆすぶられた。その本を読んだとき、大切なことは最終的な答えや結果ではないんだということにもものすごくゆさぶられた。本当に大切なものは...、真実のようなものは...、結果ではなくて、過程の中にこそあるんだというような...、いま理屈でいえば、そんなことが、私におしよせてきて、それで私はぼろぼろ泣いてしまって、もういい、もういいと思ったんです。絶対の結論



たいなものに向かってまっしぐらに生きていかなければならないのではないかという考え方を、その時の私はしていたんだと思います。そうやって、あのときの私を助けてくれたもの、私に指針をくれたものは、たしかに「本」だった。私個人にとっては、本は欠かすことができないものでした。

ここで、ちょっと話は変わりますが、詩人のまど・みちおさんについて少しお話ししたいと思います。ほんとうに素晴らしい方でした。昨年2月28日に104歳の見事な生涯をとじられたわけですが、私は晩年の10年間だけまどさんとお付き合いをさせていただく機会がありました。忘れられないことは限りなくありますが、ある日、こんなことがありました。葉っぱを拾ってまどさんにお見せしたときのことです。あ、これ、さっき桜新町からここへ来るまでの間に拾ってポケットにいれたんですが、まどさんにお見せしたのも、こういうきれいに紅葉した葉っぱでした。「これ、さっき拾ったんです。きれいでしょ」ってお見せしたんです。もしも私がこういうものを誰かに渡されたら、「きれいだね」「絵みたいだね」と言って、それくらいで終わっちゃうと思うんですが、まどさんはそのとき、ひとこともそういうことをおっしゃらなかった。どうおっしゃったかというと「はぁ～」とため息をつかれたあと、「この葉っぱには、こうなる理由があったんですね」とおっしゃった。私はびっくりしました。葉っぱに「この」がついたことにも驚いた。一人一人違う「この子」「この子」がいるように、葉っぱにも「この」がついた。そして「こうなる理由があったんですね」とおっしゃった。その時に私は、自分は拾った葉っぱを「この一枚」という特別なものとして見ていなかったし、それにもまして結論しか見ていなかったという事に気づかされました。まどさんは、「この」葉っぱが、「こうなる理由」というのは、葉っぱとして芽吹いてここにいたるまでのすべての時間のことをおっしゃっているんですよ……。驚いて黙っていたら、まどさんがふと顔をあげられて、ぼかんとしている私の顔を見て、ちょっと恥ずかしそうな声でおっしゃった言葉が忘れられません。「その理由をみつけたくて書くのが、詩なんです...」って、まどさんはそうおっしゃった。私はまどさんの詩の原点をかいま見たような気がしました。まどさんは、本当にありとあらゆるもののつながりについて考え続けられた方です。「見えている」と「見る」は違うと思うんです。「見ることは考えること」であり、考えることは、自分自身をも問うということでもあり、そしてその先に表現があり、伝えたいことが見えてくる...

それに加えてですが、いま話しながら思い出したことがあります。長新太さんの対談を聞きに

いったときのことです。西巻茅子さんが聞き手で、長新太展の催しの一つだったんですが、そこでびっくりしたのは、ラストの質問タイムでの長さんの答えでした。長さんに『はんぶんたぬき』という絵本があります。たぬきがばける。でもちゃんとばけきれなくて半分たぬきが残っているという絵本です。たとえばクジラの後ろ半分がタヌキのままという具合です。その時、質問に立った方が、「あんなに関係ないもの同士を、よくもまあくっつけられますなあ」と、まあ、質問というのではない発言だったから、「まあね」くらいで笑って終わると思った。ところが長さんの答えが、その予想とはまったく違っていたんです。「私はね、大変な軍国少年だったんです」とおっしゃった。えっ?! なんで? その質問にその返事? でした。そのあと、さらに長さんは「予科練にあこがれていたんだけど、試験に落ちて、帰りに自殺しようかと思ったくらいで」と続けられた。時代の空気って恐ろしいですね……。これからそんな時代にならないことを切に願いますけれども……。とにかく長さんはそのとき、自分の存在そのものを否定されたような気持ちになったという話をされた。私は、この話がいったい『はんぶんたぬき』のどこにつながっていくんだ? と思いながら聞いているわけです。「ところがね、学校で…」と話は続く。長さんはそのとき学校に通われていた年齢だったんですね。「学校でね、先生がつぶやくのを聞いてしまったんですよ」とおっしゃった。その先生がこう言ったんですって。「このクソ戦争」って。当時そんなことを聞こえる声で言ったら大変なことになる。連れて行かれちゃう。先生は、たまらなかったんじゃないでしょうか。自分のかわいい教え子たちが戦争にもっていかれることが。それを聞いた軍国少年の長さんはびっくりするわけですよ。「え? 先生、なに言ってるんだ? 」と。当時はそう思ったとしても、後々いろんなことがだんだんわかってきますよね……。

ここでちょっとつなげて話しますが、かこさとしさんにインタビューしたことがあって、「どうしてそんなに子どもにこだわられるんですか? 」と聞いたことがあります。かこさんは、いろんなところで表明されているので皆さんもよくご存知の通り、「ぼくも軍国少年でした」とおっしゃっている。「僕のようなあやまちを決して繰り返ささないでほしい。私はある種の贖罪の気持ちで、子どもたちに向けての本を作っている」とおっしゃいます。あの時代を生きた方たちには、多かれ少なかれ、そういう思いが通底していると、私は感じます。

で、長さんの話に戻ります。そのときの長さんの話の続きがどうなったかという、「そろそろ時間ですから」という会場の仕切りの言葉で、そこで話が終わってしまった。ですから長さんの口で話される続きは聞けなかったんです。だから自分でその続きを、なぜあの質問に対して、長さんはあんな話を始められたんだろうと、キャベツ畑のそばを歩きながら帰りの道のりずっと、自分なりに考えました。で、ふっと「もしかしたら…」と思ったんです。これは自分の考えたことであって、長さんがおっしゃたわけではないですから、私の勝手な解釈だと思って聞いてください。

長さんは、「笑い」という方法で、「ユーモア」というやり方で――あくまでユーモアであってギャグじゃありません――。私たちに、ある意味での「戦い方」を教えてくれていたんじゃないか…と、そう思ったんです。言葉が悪いですが、長さんは私たちに、これから世の中がどんなことになったとしても、よりよく生きていくための、最大の「武器」を渡してくれたんじゃない

かと、そんなふうに私は解釈しました。みんなが右向け右のときに、全部が何かに化けてしまうときに、ちゃんと立ち止まって、自分自身であるタヌキの部分を残していることの大事さということだったのかもしれない.....。

「ねばならない」とか、一つの方向だけに全員が向いてしまうことの危険。戦争の時はまさにそういう時代ですよ。そういえば「道徳」の



教科化.....、あれはどうなるんでしょうかね.....。とにかく、「ねばならない」みたいなことからめとられていくと、ほんとうの意味で自分自身で悩んだり考えることができなくなるんじゃないかと思うんです。なっちゃうんですね、人間って。うっかりすると、すぐそうになってしまう。そういうときに、なにがその凝り固まったものをひっくり返すのか。それを緩めてくれるのか、それは「笑い」ではないか、「ユーモア」ではないのか。長さんが「生理的に気持ちがいいということは、とても大事です」とおっしゃったことも覚えています。その言葉もどこかそういうこととつながっている気がする。長さんは、笑いと言う形に包んで、深くて強い、本当の力を渡してくれたんじゃないかというふうに私は思っています。

それでふと思い出して、昨日探してみたら見つかったので持ってきたものがあるんですけど...。これは2007年の長新太展に行ったときに、手帳にメモした言葉です。これは何かというと長さんの絵の横に貼ってあった小さなプレートに書かれていた長さんの言葉です。その中の一つですけど.....読みます。「ねえねえ、と子どもは大人に求める。なにを？ それはこれからの人生だ。ねえねえ、これからどう生きていったらいいの？ 大人よ、しっかりしてちょうだい、ということですよ。ねえねえ、この絵本を読んで読んで。お願い お願い」という、なんだか謎のような言葉が、そこに書かれていました。そのときは何気なく見ましたが、いま改めて見ると、「ねえねえ、これからどう生きたらいいの」という言葉や、「子どもは大人に求める」という言葉。「大人よ、しっかりしてちょうだい」という言葉。そういうものを見ると、やっぱり長さんは、その作品の中に、どう生きたらいいのと問う子どもに対する答えや、その時に使う本当の力を、長さんなりに込めておられたのではないだろうか、私は推測してしまうんです。

最期に、これから自分は、編集者としてどうしていけばいいのかと思うと、実はいま、非常に戸惑っています。ベストテンランキングとかあって、ランキング入りする本たちを見ながら戸惑うことが多くなりました。自分は時代とずれたのではないかなと思うこともあります。そのいくつかを私は心から「いい！」と思えないからです。自問自答です、これは。それを考えることが多くなった。私は今年60歳になるんです。会社に勤めていれば定年の年です。となると、自分の仕事ということだけじゃなくって、なにかバトンをつないでいけなくちゃいけないと思う。次の世代にどんなバトンを、どうつないでいけばいいのか.....。目下の私の最大の課題です。その時に、私がいま感じているズレというものの正体を見極めたい、という気持ちが非常にあります。いまと未来を見つめるためには、いままで行われてきたことを見返してみる必要を感じています。

そういうことを見直さないことには、私は自分の答えをみつけれないという気持ちになります。

そこで、いま私の座右の書になっている本を一冊ご紹介したいんですが、これは、あのセンダックを見いだしたことで知られる編集者ノードストロムが、著者たちに送った手紙をまとめた本『伝説の編集者ノードストロムの手紙』（偕成社）です。見ての通り付箋だらけです。これを読んでみると、自分は足元にも及ばないと思います。実に真摯に、果敢に、著者とまっすぐに向き合い、時代と向き合っている。たとえばこの中に、いまでいう性同一障害についての、そういう本を児童書として出したらしきことが出てくるんですが、彼女は著者に向かってこう書いている。「この本がでたら私たちは多くの非難にさらされるでしょう。しかし私たちは、優雅に戦っていきましょう」——と。……カッコいいですねえ。こんなこと言えるだろうか、自分は、と思います。

それと、これは先週古本屋で買ったんですが、「科学クラブ」という冊子で、昭和30年代に出た本です。科学の本であるにもかかわらず、最後のほうにはイギリスの国会とか日本の国会とかまでいろいろ書いてあって。科学といっても、いわゆる理科とかそういうことだけじゃなくもっと広く、社会科学というか、さまざまなことをつなげて考えている。こういうところにうたれます。いつのまに、私たちはなんでもかんでも分けて考えるようになってしまったんでしょう。カランカランというベルひとつで、理科、社会、国語、と分けてとらえる癖がついた。でもほんとうはそうじゃない。あらゆることは繋がっている。そのことに対する想像力がとても弱くなってしまった。

最近なくなってしまうんですが、学研が子ども向けの科学雑誌を出したのがいつかという、1947年です。戦争が終わって2年目。そんなまだまだ普通の暮らしも大変だった時代に、大人たちは何を願って何を祈って子どもたちに向かって、この雑誌を出したんだろう……と、そういうことをもう一度考えています。

そこから、では自分は、いまどんな時代に立っているのかと考えています。9・11以降の時代に、3・11以降の時代に、自分が立っているんだということを考えています。そこをふまえて、自分のやるべき仕事や、やんなきゃいけない仕事を……、個人的に残された時間も少ないと思っているので、いまはそのことを見据えて、仕事をしたいという気持ちがとてもあります。後藤健二さんのことも胸にひっかかっています。あの方は戦火や紛争の中の子どもを見つめて、それを日本の子どもたちに伝える本を作っておられたんですね……。日々新聞を見るたびに、「ああ…」とため息をつくことが多くなりましたが、だからこそ、自分の持ち場でやれることは何だろうと思うし、自分の持ち場を離れてはならないという覚悟とか、そういったものをもう一度あらためて考えています。これから自分がどれだけの仕事をできるかわかりませんが、できるだけのことをしたいし、次の世代に何かをつなげていくことができたらいいなと思っています。

講師 かねもり り え 兼 森理恵 (丸善・丸の内本店児童書担当)

1999年にジュンク堂書店に入社し、池袋本店、新宿店を経て、現在は丸善・丸の内本店で児童書を担当し、児童書担当歴は16年となる。新規店舗の立ち上げや絵本のコーナーづくりやサイン会などのイベントを多く手掛けており、作家の息吹が感じられるような売場づくり等で活躍している。

みなさん、こんにちは。丸善丸の内本店の兼森理恵です。

私もいろいろお話をすることを考えてきましたが、濱野さんと松田さんから受け取るものが多かったので、話が少し予定と変わってしまいます。まずは自己紹介がてら、私の読書体験と子どものときにどう本とかかわってきたのかをお話したいと思います。

私は潤沢な本に囲まれて育ちました。幼い頃から祖母も誕生日やクリスマスにはおもちゃではなく本を与えてくれる家庭でした。いわゆる箱物の図鑑をたくさん並べることがステータスだった時代ですね。とにかくいっぱい本を買ってもらいました。私は読書が好きになるきっかけになった本と、なぜか本屋でも図書館でもなく画廊で出会いました。

青山にスペースユイという画廊がありますが、知人がやっている関係で、よくそこに連れて行ってもらいました。例えば、安西水丸さんとかスズキコージさんとか、子ども心に「ちょっとわかる絵がある」そういう個展のときはすごく嬉しかったです。そんな中、初めて祖母にその画廊で買ってもらったのが、福音館書店の月刊誌の連載をまとめて単行本化した「大千世界のなかまたち」という本です。これが私のはじめての本との核のようなものを受け取った本です。スズキコージワールドとの出会いです。今は、架空社さんから「大千世界の生き物たち」というタイトルで出版されています。もうちょっと生き物も増え、ステキな感じになっているので、もしよかったらご覧いただければと思います。世の中にはきっとこのような仲間がたくさんいると信じていました。例えば、本のすきまにいるスキママン。本がきつくてぬけないときはそこにスキママンがいる。お店で本の整理をしていても「スキママンがいるからちょっと本がぬきにくい。1冊ぬいておこうか」そういうことを今でも考えたりしています。また、私の部屋はすごく汚かったので、いつも怒られていました。机の引き出しがあかないときはセンリョールという生き物が机の中に住みついでいて、ひっかかっているからあかないんだ。こう言い訳しながら、いつもその本を読んでいました。楽しいときはもちろんですが、学校でいやなことがあったときも、勉強机の下に入って椅子をギリギリまで閉めて、狭い中でこの本を読むときが自分の幸せな時間でした。全然暗い性格の子ではなく活発でお友達もいましたが、そんな子どもでした。

以上が私の絵本体験というか絵本の核であるとしたら、読み物の始まりは、森山京さんの「大きくてもちっちゃいかばのこカバオ」です。残念なことに絶版ですが、偕成社さんから出ている本で、3巻まで続いています。この本もやはりスペースユイのギャラリーで、オーナーの妹さんが絵を描いている縁で知りました。森山先生の本の中では「きいろいばけつ」(あかね書房)が

有名です。子どもの頃は何がすごいのか全然わかりませんでした。とにかく森山先生のようにしゃべりたいとか、先生のような日本語を使えるようになりたいと漠然とっていました。後から思うと森山先生のお話は考え方が自立しているんです。例えば「大きくてもちっちゃいかばのこカバオ」で、舟がほしいと思っているかばのこが散歩していると、川からおもちゃの舟が流れてきます。かばのこは、「おほしさまがぼくのねがいごとをきいてくれたんだ。」と言って、うちに持って帰ります。かばのお母さんは、舟底に「キツネコンスケ」と書いてあるのをみつけます。「きつねくんの舟じゃないかしらね」とお母さんが言ってもかばのこはききません。「ちがうよ。キツネコンスケ号っていう舟の名前だ」と言います。そして嬉しくて舟を枕元に置いて眠ります。でも、夜ふと目が覚めてお母さんはまだ仕事をしているのか、居間に灯がついている。「ねえお母さん、きつねくんの舟だと思う？」と聞くと「そうおもいますよ」と言います。お母さんは決して「そうしなさい」という言い方をしません。かばのこの意見を尊重し、お母さんから促すようなことを言わない。すごく自立してるお話だなあと思いました。幼年童話は、「くまさんがいました。うさぎさんがいました。みんな仲良くしました。マル」というイメージを持たれがちです。別に馬鹿にして言っている訳ではないですよ。しかし、本当に幼年童話こそきちんとして核がなくてはいけない。森山先生は、コピーライターをされていて「25歳はお肌の曲がり角」という名コピー

を作られたバリバリのキャリアウーマンだった方です。やっぱりその先生の持つゆるがない自立した芯の部分が、物語にあらわれているのかなあと。低学年で初めて読み物と出会うときに、有難いことに私はそれを受け取って生きてきたんだと思います。この2冊は私にとってすごく特別でした。

学校図書館にもいっぱい通いました。2年生から本が借りられるようになるのですが、こんなに本が潤沢にある中で、なぜ好きな本を買わなかったのかはわかりません。3年生から6年生まで同じ本を借りていて、トータルすると多分100回近く借りてると思います。その本は、ルーマー・ゴッデンの「人形の家」(岩波書店)。ただ3年生ぐらいですとあまり意味がわからないまま読んでいました。割とまっとうな読書体験をして大きくなったと思います。

そんな私が本屋さんになったのは、本当にたまたまです。本屋さんになりたいと思ったわけもなく、どうしてだかいまだにわかりません。たまたま本屋さんという職業に就いて、児童書の担当も希望したわけではなく、「子どものときに本読んでたな、ラッキー！」くらいの気持ちでした。本との向き合い方ががらりと変わったのは、今はなくなってしまった、ジュンク堂書店新宿店のオープンで初めて自分の売場を持たせてもらったときです。それまでは先輩の下についてやるような感じでしたが、初めて一国一城の主になりました。でもやっぱり自分に足りないところもあって、わからない事だらけで、どうしていいかわからなく辛かった。何とかしなければいけないのに、何をどうしていいかわからなかったんです。

そんな時にスズキコージさんのライブペインティングに誘われて行ってみました。多分渋谷でやったイベントだったと思います。ライブペインティングでコージさんが白いキャンパスにグングン手で絵を描くと、一つの世界がそこに見えてくるんです。見えてきた時に鳥肌が立って、

絵本は形になったときにもうおしまいではなく、ちゃんとここにライブがあるんだと、ライブペインティングに出会って初めて感じました。音楽や演劇は、ライブ感がわかり易いけれど、絵本にもちゃんと躍動するものがある。きちんとそれを売り場で体験、体感できるようなことを私達が発信していかなければ。そういうふうに考えて売り場を作ればいいんだと思ったら、ストンと腑に落ちてそこから変わりました。



そして、最初はトイレの隅にあった売り場も児童書ブームの中、どんどん大きくなり、たぶん日本の中でもすごく広い児童書売場をもつことができました。だからイベントやフェアで好きな本を何でも置けたし、本当に好き放題やっていました。とにかく生きてる感じがする売場を心がけました。まずはじめにしたのは色紙集め。よくおいしいラーメン屋さんに「何月何日にだれそれが来ました」という色紙が貼ってあります。そういうふうに、自分の好きな本を描いた作家がここに来たのかもということが伝わるだけで、子どもたちはちょっと嬉しいのではと思ったんです。有難いことに、東京の大きな本屋さんに作家さんが来ることもあるし、自分で出かけて行けばお会いできる機会もある。「ともかくラーメン屋みたいにしよう。」そう思いつきました。広い壁一面に、最終的には150枚くらい色紙を飾りました。よく出版社さんが「作家さんに(色紙を)書いてもらったので送りますね」ということもあるのですが、なるべく自分で足を使ってちゃんと対面してもらおうと思っていました。「かいけつゾロリ」の原ゆたか先生のサインは、見ていてすごくわかりやすい。「原先生、このお店に来てるんだあ」と子どもたちが言うのを見ると、同じ空気を吸っていることがわかってもらえて嬉しかったです。それが一歩足を踏み出したことです。

先ほども松田さんがおっしゃっていましたが、あらゆる事はつながっています。児童書売り場は全部のジャンルがある本屋さんです。科学絵本から社会の本、文庫、絵本、読み物があります。わからないことがあったら児童書売り場で調べると簡単なことばでわかりやすく教えてくれるので、私はすごく重宝しています。それから書店はお客さんの手に本が渡る一番の場所、図書館もそうですね。一番始めに出版社さん、作家さんがいて、本があってお客さんがいて、そこを繋ぐコミュニティがあります。それが書店です。本を手にとって意外な出会いをしてほしい。繋がって存在してほしいと考えています。そのためには面白くなくちゃいけない。文化祭みたいにしたいと思っています。毎日文化祭の準備をして、毎日何か催しがあって、毎日何かやっている。とにかく創造をすることはどんな仕事でも必要だと思います。売り場を作るときも、自分のことを秋元康さんだと思うようにしています。AKBといっしょです。どの絵本をどんなふうに売るのかプロデュースしていくのが書店員の醍醐味です。

これは「ちいさながくのとも」の去年の11月号「かいちゅうでんとう」。みやこしあきこ

さんの作品です。彼女がデビューしたBL出版から出ている「たいふうがくる」が大好きな絵本で、初めて見た時にこんなグラリとした非日常感を感じさせてくれる絵を描く人がいるんだ、とびっくりしました。この本に出会ったとき、「たいふうがくる」と同じような感覚に陥り、100冊売ろうと思いました。私が100冊売ったところで全体で考えたら大した事ないかもしれませんが、ただ、これが2年経つと福音館では雑誌なのでなくなってしまいます。でも人気のある本だったら書籍化される可能性がある。書籍化されるようにみんなでたくさん売ろうと考えました。うちの児童書チームはできないと言ってはだめなんです。できないは禁句です。この本を最初に見たときに思ったのは、科学絵本としても良いのですが、白と黒の使い方が上手い。懐中電灯の光が大きくなったり小さくなったり、遠くまで照らせたり近くを照らすと丸が小さくなったり。ワクワクする身近なところにあるファンタジーが、たくさんつまっていて、どうやって売ろうかといういろいろ考えました。私は「売り場を真っ暗にしたいなあ」と言ったんです。もう一人の後輩の女の子が「電気消しちゃいますか」と。でも丸善丸の内本店はオアゾというビルに入っているの、オアゾの人に怒られないためにどうするかをみんなで考えました。結局かなりの大きさの絵本に出てくる子供部屋そっくりのドールハウスを作りました。絵本を描くときに参考にしたいという、シルバニアファミリーのミニチュアの模型のセットやお人形とかをみやこしさんご本人からお借りすることができたので、手作りカーテンを付けたり、ベッドカバーを作ったりしました。そこに暗幕をつけて小さい子どもがかぶって、中で懐中電灯を照らすと、絵本と同じ世界になる。結局電気を抜かずにそこにたどり着きました。たどり着いたときに今まで見られなかったものを見ることができました。

私たちはどうしても同じ値段で同じ本を売らなければいけないので、勝負どころは何なのかいつも考えます。それは、いかに楽しかったかという思いを持ってもらうこと。自分たちも楽しみながらワクワクをお客さんに伝えること。児童書売り場というのは未来のお客様が来る所です。のちのちに、文芸書を買ってもらったり理工書を買ってもらえるお客さんに育ってもらわないといけないので、小さいときの本屋さんでの楽しかった記憶は大事だと思います。本当に楽しかったと思ってもらえるようにしたい。でもディズニーランドほどお金もかけられないし、そもそもアミューズメントパークにする事もできないです。大事なのはいかに五感に訴えかけられるか。あとは意外性。例えば黒い本を「この本は黒いです」と言っても面白くないから、「これ赤いですよ」とか言ってみる。こういうトラップのようなものをいろいろなところにしかけて、1回目は気付かないかもしれないけど、次に来た時にこんなことがあったとか、次にまた来たらちょこちょこ変わっていたり、そういったことを考えるようにしています。

例えば「こどももちゃん」(偕成社)という本、2005年くらいに出た本です。この時は、桃の香りのするスプレーを売場にシュツとしてました(笑)。今、読み聞かせはしませんがざつとご紹介します。こどももちゃんは子どものももちゃんです。ずんずん歩いていきます。「どこ行くの?」って聞かれても「教えない」。「遊ぼう」って言われても「遊ばない」。ちょっと機嫌が悪いんですね。子どもには特有の不機嫌さみたいなものがあるじゃないですか。そんな感じでこどももちゃんはわき目もふらずに歩いて行く。「こどももちゃん、一緒にあそばないの?」っ

て聞かれても「あそばない」って言ったり。歩いていった先でくまの子がドングリを集めています。子どもは、いっぱい持っていても「1個だったらあげるよ」と言ったりしませんか。そのくまも「1個だったらあげるよ」と。キラキラした宝石みたいなドングリを分けっこしようということになり、みんなが集まってくる。こどももちゃんも来るのですが「ドングリいらない」と言います。それでは、ここで質問です。



どうしてこどももちゃんはドングリいらないと思いますか？今まで私、答えがわかる人に出会ったことがないんです。この本好きで2006年くらいから売っていて、新宿店の頃はもちろんですが、丸の内店に来た時に残念ながらこの本がなかったんです。販売履歴ゼロです。でも私が来て3年経ちますが、今はたくさん売れてます。なぜなら私が毎日この本を話しているからです。簡単に先ほどの答えを言いますね。実はこどももちゃんは何かを持っているんです。ここでくまのお母さんは、さすがお母さん、わかるんですね。実はパンツのゴムが切れていてこどももちゃんは手がはなせなかったのです。それにしてもこどももちゃんって少し気持ち悪くないですか？（作者の橘春香さんは）雑誌の『an・an』のセックス特集などでイラストレーターをされるなど、すごく官能的な絵を描く方です。絵本はこれが初めてだったのですが、わりと今ふうな絵の柄なのにお話はすごく単純というか可愛らしい。ギャップの良さですね。全体のデザインも彼女がしています。アリさんだったら小さい字にしたりすごく凝っている。ちょっと（うしろの方には）遠くて見にくいんですが、こどももちゃんすごくいい顔で笑うんですよ。いつのまにかかわいく思えてきます。にっこり笑って最後は共食いみたいですがお礼に桃を持ってくるんです（笑）。この本、対象年齢ではない人にはもちろん売れないこともありますが、8、9割は今みたいに話の筋を聞かせると買ってくれます。もしよかったら買って下さい。

こんな感じで私は本を売っています。しゃべっていると、結構引っ込み思案なお客さんが横で聞いていて買ってくれたりします。だから店頭ではべらべらしゃべっています。松田素子さんが「ヤモリの指から不思議なテープ」という本を出されました。出版される前に、松田さんが私のところに来ました。「ヤモリっていうのはね、こうやって死んだヤモリをバツと投げても壁に付いてるのよ、おかしいでしょ。」「フーン。何で？」「それは全部この本に載っているから！」「おもしろいね。じゃ何か（企画）やる？」みたいな話になりました。新宿店の閉店の3月にこの本のフェアをしたのですが、フェアの前で松田さんとこの本の話をしていると、とおまきに見ていたお客さんに、松田さんはこの本がいかに楽しいかということを熱弁するんです（笑）。たぶん1時間で15冊くらい売ってくれました。ここに来たらおもしろい情報が得られるとか、変わった人がいるとか。そういうことでもいい。もちろんしゃべりたくない人もいます。そういう人に無理強いはいしない。ただ、せっかくお店に来てくださったからには何か出会いや発見があってほしいですね。

さきほど濱野さんが、大人にも手渡す本が必要だとおっしゃっていました。子どもの本は、大人が媒介者で絶対介入しています。

読み物に関しても絵本に関しても、いろいろな世相を反映しているものが、どうしても時代的に出てきてしまっている。それを子どもに本当に手渡すべきなのかをすごく考えます。それからさっき(本の売り上げ)ベストテンの話をされていましたが、売れている物が偉いのかということとは常日頃考えて、私は割とそれと戦っています。本を「面陳」にしているということは、私の店ですごく推薦していることになってしまうんです。書店の平台に顔(本の表紙)が上をむいて置かれていることを面陳というのですが。ああいうふうに置くとよく知らないお母さんは、「すごくいい本なんだ、だって、丸善丸の内本店さんがお薦めしているんでしょ」と思われてしまいます。そういうところの責任はすごく考えます。売れる本を置くのか、売りたい本を置くのか。せめぎあいですね。

あともう一つ、これからの児童書売り場を活性化していくために何が必要か。それは男の人。丸の内は本当にお父さんが来るところです。お父さんというか男の人。お父さんには、多かれ少なかれ子どもがいるので、多少は子どもの本に関わります。でも、全然子どもに関係のない丸の内サラリーマンに児童書売るために、男の児童書というフェアをやりました。なぜか女子が本を推奨しているのですが。心の中で、子どもの本だと思ってなめんな！という気持ちで店頭に置きました(笑)。男の人が読んでも絶対面白い何かがそこにあるので、新たな扉を開いて下さいという思いでフェアをいろいろやっています。男性のためのコミュニティがあってもいいのかなと思います。土日はやっぱり子どもたちのものなので、金曜日の晩に大人のための児童書の夕べというサロンを25名くらいの限定でやっています。絵本だけのこともあるし読み物のこともあります。

それから、「鬼ヶ島通信」という佐藤さとるさんが一番最初に始められた同人誌、通販でしか買えない、会員しか買えない雑誌があります。その雑誌がまだ続いていて、今の編集長が那須田淳さん、あと末吉暁子さん、柏葉幸子さんとか(が参加している)。本当にキラキラした作家さんが書かれている同人誌です。普段なら買うことができない雑誌を店頭で売りたいと思って、今展開しています。佐藤さんから始まって、若い人では片川優子さん、石川宏千花さん、河合二湖さん、それから森絵都さんとか。本当に昭和の文学史のような並びになって、私も本を配架しながら、恐ろしいくらい圧倒されてしまい驚いています。読者と何かをつなげていくことも書店の仕事だと思って、そんなおもしろいフェアをやっています。お客さんが来ることで、いろいろな空気が変わっていく。作家さん、編集者さん、出版社さん、私たちだけでなく、お客さんの力で売場は絶対に変わっていく。なので本当に、書店に足を運んでもらえたらと思います。ありがとうございました。

＜第2部 意見交換会 ～書き手から、作り手から、売り手から＞

(総合司会)	<p>それでは再開いたします。ただいまより第2部「意見交換会」を行います。 (講師とパネリストを紹介する)</p>
生田部長	<p>どうぞよろしく申し上げます。第1部で、大変興味深い話がたくさん出てきて消化不良ですよ。これも覚えておかななくちゃいけない、あれも考えないといけないといっぱい重なってどう整理つけていいかわからないですけれど。</p> <p>1時間しかないのでこんなふうにしたいと思います。まず最初は、「なぜ私は、あるいは子どもは、本を読むことが大切なのか」パネリストがどう考えているのか聞きます。松田さんはお話の中で、「私は子どもは本を読まなければいけないとは思っていません」と言われました。でも正確なニュアンスは伝わっていない可能性があります。次は、これを今日一番議論したいんですけど、子どもと本との素敵な、あるいは幸せな、あるいは楽しい、出会いがある、そういう出会いのためについ、みんな図書館員にやってもらいたいとか学校の先生にやってもらいたいとか言うんだけど、まずは自分で何ができるかを考えてみましょう。次にみんなにできることは何か、ここポイントです。ここ(P45付録参照)に書いたのは、平成24年に文部科学省が主催して子ども読書を考える熟議という、第1部講演会、第2部が分科会で図書館の関係者とか読書のボランティアのかたとか、そういう関わっている人たちが集まって分科会をやって、「何が一番大事なんだろう」という議論をして出てきた意見なんです。そこにぼくの意見を二つ追加しています。この点をそれぞれがどうお考えになるかお訊きしてみたいと思います。そして最後にせっかく今日みなさん集まっていますから、お土産を持って帰っていただく。それぞれにおすすめの本、ぜひ読んでもらいたい、という本をすすめていただいて終わり、こんな流れにしたいと思います。</p> <p>では最初に、「なぜ私は、あるいは子どもは、本を読むことが大切なのか」。まず、読まなければいけないことはない、と言われた松田さんから口火を切ってもらいます。</p>
松田さん	<p>えーと、なんというか、「ねばならない」と言ってしまうことが危険だと思っているんです。そう思ったことでもう強迫観念に入ってしまうこともあるんじゃないかと思っているので……。こんなことがありました。あるお母さんから「うちの子に課題図書を見せたんですが、感激しなかったんです。うちの子はおかしいんでしょうか？」って。とんでもないですよ。あれはいわば、お見合いですから、単に。本っていうからみんなよくわからなくなるんですけど、たとえば音楽が大事だと思っている人が、子どもはみんな音</p>

	<p>楽を「聴かねばならない」と言われると、えーっと思いませんか？ 本の場合あまりみんなえーって思わないんですけど、そこらへんを勘違いしないことだと思うんですよ。本は素晴らしいですよ、素敵ですよ、私は大好きなんですけど。でも、「ねばならない」と言ったり、「よい絵本」という言葉に左右されすぎるのは危険。「よい絵本」というものを自分の子が感動しなかったからって、自分の子どもがおかしいのかもと言ってしまうような、そんな論理展開に陥る危険性が確かにある。だからそこをきちっと踏まえたうえで、本ってさ、読まなくてもいいんだけど、読むとこれがまたおもしろいんだよという、この2段階に分けた論法でいくのがいいと思いますね。</p> <p>子どもたちの前で初めてしゃべったとき、それは、私の母校で、先生が「本を読む子に育つような話をしてね」って言われて。でも、そのとき子どもたちに最初に投げかけたのは「今日の月の形を知っている人は手をあげて」という質問でした。3分の1くらい手が挙がった。エラいです。つづけて子どもたちに言ったんです。「私たちには何のために目があるんだろう」って。それは決して「本を読むためにではないと思います」という話から、あえて始めました。たとえば月や葉っぱやいろんなものから、なにかしらの合図が来ていて、その合図をちゃんと見て受けとるよということ私たち生き物は、人間は、目をもらったし、耳や鼻ももらってるんだと思うと言いました。まず最初は、そんな風に身の回りの世界をじっと見るということが大事なんだ、それをやらないで、もしも本だけ見ていたとして、そこから何かを得られるというのは、それは違うと思う。そこにはいわば字しか書いてない。もちろん絵や写真もありますけどね。まあ、とにかくそうやって太古の昔からあったものを含めて周囲のいろんなものを見て考えること。それが「目を鍛える」ということで、そうやって目を鍛えていけばきっと、字と字のあいだにあるいろんなことが見えてくるはずだという話から始めて、本の話につなげました。ひとことで言うのがむずかしいんですが、そういう意味で本を「読まねばならない」という畀に、ちょっとはまりたくないと思っているんです。</p>
生田部長	じゃあ、兼森さんは。
兼森さん	<p>もうまったく松田さんと同意見なので、ホントなんですけど、私も売り手なんで本売れないとごはんが食べられないので、もちろん売りたいのはやまやまなんですけど。</p> <p>お母様方から、うちの子は読まないんですよ、読むようになるためにはどんな本を読んだらいいですか？というご質問が多くあります。でも、私も本当に同じで、強制で読むものでもないと思うし、ほんとに時代的にゲームがあったり、ネットがあったり、情報ははっきり言って本以外のところからも得られたり、あとエンターテイメントとしておもしろいこともいっぱいある世</p>

	<p>の中だけど、私は本で受けてきた恩恵がある自負があるのでそれを売場で伝えられたらいいなと希望はあるけれどもやっぱり読みたくない子に無理に読ませてもっと嫌いになられたらどうしようというのは。とにかく、だったら本屋さんにいるってことでも楽しいと思ってもらって身近な存在になってくれればいいという希望を持って売場づくりはしてますけど、嫌いな子に無理に読みなさいという気持ちは私はならない。</p>
濱野さん	<p>ここで、絶対読まねばならないと私が言うのがおもしろいのかもしませんが(笑) そうは思わなくて基本的に松田さんがおっしゃるとおりだと思います。「ねばならない」というのはこれはとても危険なことだと思います。音楽を例に出されたように、音楽だけでなく、たとえばスポーツでもね、本来だったら出会っていればおもしろかったかもしれない、出会うチャンスがなかったこともあるのと同じように、本もやっぱり出会うチャンスがあればおもしろさが伝わるとか、おもしろさが理解できる時になんらかの外的な要因で、出会えずにいるってことはとってももったいない事なんじゃないかなって私は思います。これは2番のことに関わることかなって思いますけど。あと、まあ、良い本なんて言ったって人によってさまざまで、人が言うから良いわけじゃない。基本のキじゃないかな、と思います。</p>
生田部長	<p>「ねばならない」ってことはないんですけど、それでもやっぱり読んでもらいたいですよね。読んでもらいたいと思っているから、子どもと読書の今日の会議にも来てるし、日々子どもたちに時間を割いて読み聞かせをしているわけです。だから、「ねばならない」のではないけれども、読みたい。本との出会いの、チャンスを作ってあげたい。それは何故ですか。</p>
松田さん	<p>具体的な出来事なんですけど、ぼろい一軒家の庭付きを借りていたときに、そこにやってくるようになった子どもたちがいて、4歳の子どもに私がナンパされることから始まったんですが(笑) 結果的に6人の子どもたちがしょっちゅう来ていました。仕事から本は山ほどあるわけですが、だからといって「読みなさい」というのはイヤなので、その言葉は言わなかったんですよ。するとまあ、本よりも、庭で木登りしたり、池を作ったり、たき火をしていたりする時間の方が長いですね。で、あるとき、別に何の企みもなかったんですが、自分のために、小さな本棚に大事な本を移動したんですね。で、その子たちに「ここにあるのは私の大事なやつだから、さわらないでよ」って言ったんです。「さわんなよ」と言った瞬間ですよ、彼らの目が変わったのは、「借りてあげてもいいけど」って言いだした(笑)。その本棚には主語があったわけです。「あたし」の大事なのが入っているというー。この主語をもって彼らに「さわるな」と言ったことが、もしかしたらけっこうポイントだったんじゃないかと思います。まあ、彼らにしても私のことが嫌いなら来</p>

	<p>ないわけなので、そういう嫌いじゃないやつが大事にしているということで気になったんでしょう（笑）。</p> <p>さっき兼森さんが、売場の作り方を言ってました。このあいだ丸善に行った時に「いいな」と思ったのが、いわゆるどこぞのベスト10が展示されていたわけですが、ところがそこに、どこぞのだけでなく、というか、どこぞのを退けて「丸善の我々がすすめるベスト10」というのが…。ね？</p>
兼森さん	<p>某有名雑誌のベスト10ありますよね。いい本も入っているんですよ、もちろん、すごくいい本も入っているんです。ただ、これが今のベストなんだと思うと売れた順なんですよ。ちょっと悲しくなっちゃう。私たちは出版社さんからそのベストテンのフェア用にかわいいミッフィーちゃんのポップをもらうんですよ。1位はこれ、とかって書いてあって、でも私たちが思っている1位は入ってないんですよ、そこに。だから全員でミッフィーちゃんのタイトルのところだけ消して丸善丸の内本店の1位なんとかっていう風に全部書き直して出してしまいます。</p>
松田さん	<p>そういう主語があるということは、なににつけてもホントに大事だと思えます。人に何か伝えたい時に、主語をもって話すべきだと私は思っています。偕成社に入社したとき、数ヶ月めくらしいに実は辞めようかと思ったことがあったんです。私は編集者に向かない、できない...と思って。持込の人が来たときに脂汗がいて何も喋れなくて、こんな恐ろしい仕事はとてできないと思ってある人に相談したら、げらげら笑われたあとに、「おまえさー、何かを見て好きか嫌いかわかるか？」っていわれたから「それは...、わかると思います」って答えたら、「じゃあ、大丈夫だ」と言われた。なんで？って思いましたけど、そのときその人が「いいか、おまえ、主語をなくすなよ」って言ったんです。「会社にいると 我が社としては とか、そういう主語がないしゃべり方をし始めるやつがいっぱいいるんだ。おまえ絶対、主語をなくすなよ。そしたら大丈夫だ」って言われました。そのときはその言葉の意味がわからなかったですけど、今になるとよくわかります。で、さっきの我が家に来ていた子どもたちの態度が変わったのを見たときも、私は「なるほど、これだな」と思いました。もうひとつ。ある時、一番本に興味も示さなかった子が妹を連れてきたことがあったんですよ、その妹が私に「なにか読んで」と言うから、絵本じゃなくてグリム童話をひとつ読みました。終わった時に「はい、おしまい」って言ったら、兄さん</p>




	<p>の彼が、ずずっと寄って来て「次は...」って言ったんですよ、「ん？ あんた聞いてたの？」ですよ(笑)。こっち向いてなかったから聞いてないと思ってたら、実は耳だけダンボで聞いてたんですよ。「じゃあ...」と、彼が指さす目次のお話を読んで、また読んで、また読んで、また読んで、とうとう声がかれてきて、気がつけば3時間ですよ。自分でもびっくりしました。そのとき、物語の強さ、時を超えてきた物語の強さに本当に驚いた。それ以来彼らは少し本を見るようになりました。それがいかに面白いかわかったのかもしれない。今はもう25歳を過ぎてるんですが、このあいだ久しぶりに会ったら、すごくしっかりしたことを言うようになって「おまえがそんなことを言うようになったなんてねえ...」と言ったら、ニヤッと笑って「素子さんにたたきこまれたからさ」と言われました。(笑)うれしかったです。その中には本のことでも入っていたんですよ。</p>
<p>生田部長</p>	<p>物語のおもしろさを伝えたいとか、この本のおもしろさを伝えたいとか、具体的にはそういうことなんですよ。子ども一般はないですよ。でもつい子どもにいい本、子どもに良い絵本と言うんですけど。長い年月かけて相対的にはそういう本・絵本ができてきます。20年間30年間かけてうまれてきた。それはそういうことが言えるとしても、その子どもにということとイコールではない。そこをまちがえないようにしなければいけないですね。もうひとつは本を読むってことが紙に書かれた本を読むことだけではない。長田弘さんが詩に書かれたように、本を読もう、もっと本を読もう、でも紙の本だけでなく、世の中に存在するものはみんな本だ。それを読むってことは、一方的に読んだってことではなく、対話を要するということです、考えるってことです。</p> <p>子どもの本との出会いのため、兼森さんは、ジュンク堂に以前勤めておられて、そこでさまざまなフェアをおやりになったり、作家と読者が会おうための工夫をされたりして本を手渡すということをされているんです。今日聞いて、えっ、そんなに売ったんですかってびっくりしましたけれど。どういうことかと言うと、本の魅力が読者にちゃんと伝わっていないということです。そのおもしろさが。今の出版界の現状では。出版社が本を出しても、その本当のおもしろさが必ずしも読者には伝わっていない。そこにそれを伝える人がいないと本は売れないですね。</p> <p>兼森さんそのところの説明をお願いします。</p>
<p>兼森さん</p>	<p>まず、売場づくりってほんとにプロデューサーと同じ仕事で、その本1冊1冊の個性といいところ、かわいいところを考えるんですよ。私は前にワークショップでやったことがあるんですけど、本を初見で渡して、はい、今からあなた達は無人島に行きます。無人島に行って財産は百冊の本しかありません</p>

	<p>ん。この本を百冊売らないとご飯が食べられません。じゃあどうしますか？というワークショップをやったんです。実際、何をするかと言うと、否定ってね、けっこう人間って簡単にできるんですが、その本のいいところを考えるんです。角がまるくて危なくないとか、投げても大丈夫とか、日本製とか、最初はそういうことで全然いいんです。その本のいいところを考えていく。今、売場に4人いるんですけど、担当者は、必ず話すようにします。読み物でも絵本でも。読みものはやっぱり頭も固くなってきているので長いファンタジーとかはしんどいんですけど、どうしてもって思うようなものは課題図書にして全員読むようにしています。で、話します。話しているうちにどうしてこれがこんなに好きなのか見えてくるんです。そうするとそれが自分の言葉になるんですよ。お客さんに薦めるときもその言葉がウソじゃないというか、うわっつらでなく核の部分で話ができる。そんな風に本の核を理解したファンが4人いたら、一日に何冊1ヶ月何冊売れるか。それを全国の書店でコツコツやっていたら、多分ベストセラーつくるのなんて簡単なんですけれど、売ることって決してそんなむずかしいことだと思っていないんですが、やっぱりそういう力がなかなかつなげていけないのが現状。でもお店でさやかながらやれることがあるんじゃないかと思っています。</p>
生田部長	<p>本屋さんはそのことです。皆さんの場合は、子どもに対して絵本をお読みになったり、読書会ですすめたり、でも、基本は同じだと思うんですよ。いい本だと言われてるから、紹介します、読みます、ってことじゃなくて、この本のおもしろさ、物語のすばらしさを伝えたいというその思いがすごく大事。読み聞かせだってその場で読めます。読めるんですけど、その本に込めた思いを伝えるには、その場で読んだのでは伝わらないと思います。濱野さんにお訊きしたいんですけど、出版不況で本が売れない。そんなに大きな波をうけないと言われてた児童書も絵本もだんだん売れなくなってきている。作家として、子どもたちに伝えるためには、何をしてほしいか、あるいは何が自分ではできると思われますか。</p>
濱野さん	<p>それがわかれば苦労はしません(笑)。売れるとか売れないと言ってもわからないんですよ。多分、出版社の編集のかたがたが一生けん命考えて、作っても、売れるかどうかはわからないし、全然違う要因で売れたりすることもありますよね、たまたま何かで紹介されて、とかね。売れるかどうかわからないからあんまり考えててもしょうがないと思います。ただなんて言うのかな、やっぱり書き手として一番なのは、まず自分が面白いと思うものを書く事が一番かなと。兼森さんと話してたんですけど、彼女のところに時々、というかたまに行って、ちょっとおしゃべりしたりしたことがあります。お仕事の邪魔をして申し訳ないと思うんですけど、でも彼女は作家</p>

	<p>とかそういう人と話すことを、プラスに考えていることがわかったので、これからも遠慮しないでおこうかなと思いました。なんていうのかな、「伝手」、書店員とかもそうだし、読書普及運動されてるかとかそういう人たちが、気軽にこんなことしませんか？って作家に声をかけてくれればいいのに、ということは常々考えています。</p>
生田部長	<p>松田さんは、なんか気軽にやればいんだよっていうことはありますか？</p>
松田さん	<p>よく言っているんですけど、絵本って高いってよく言われますよね。そういう方には「10で割って」と言います（笑）。絵本は10回以上読みたいから買うんでしょ？ 本当は100で割って欲しいくらいなんですけど。1500円のは1回150円。安いでしょ。私たちは作る側にいる人間ですから、経費がどれほどかかっているか痛切にわかる。本当に薄い利益をみんなで分け合いながら、お金がかかる中で本当に良心的なものを作ろうとしている分野だと思います。だから最低でも10で割って、できれば100で割ってね、という言い方をしますね。「売れる」という言い方をすると、お金に関係するから下品な価値基準と思われがちなんですけど、とても大事なことで、それはつまり「届く」ということなので—先。届いたという証拠ですからね、売れるって。初版は強引にでも出せるんですよ。だから一番うれしいのは重版になった時ですよ。重版がかかったら、そこで初めて「いてもいいよ」って（笑）言われた気がする。</p> <p>—先ほど、ちょっと話題に出たんですが『ヤモリの指から不思議なテープ』（アリス館）という、絵本ではなくて、科学の本を作ったことがあります。その中身は物理も入ってくるし、実のところ非常に難しい歯ごたえのある内容なんです。私なんて、学生時代に数学で赤点とったことがあるのに、なんでこんなことやっているんだろう？と思いながら、でも必死でつくりました。で、途中で出版社の社長さんと大激論になってしまった。あまりにも時間がかかっていたからです。「わかったふりをしない」ということが重要だったので、それを本当に自分自身がわかるのにとっても時間がかかってしまったんです。しゃぼん玉はなぜ虹色に見えるのか？ちゃんと理解するのに私は一週間くらいかかったかも。でも自分がしっかりわからないと子どもにわかるように伝えることなど絶対できない。だもんですから、社長はいらいらされたのか、「もっとクイズ形式で、つくればいじゃないか」と言われて...。「問題はこれ。答はこれ。そこからこんなものが発明されました。終わりという感じでやればいだろう？」って言われたんですけど。そのときに、私は申し訳ないけれど、私が作りたいのはそういうものではないと説明した。</p> <p>この本が出たのは2011年の暮れだったんです。作っている最中に3.11が起こった。原発事故が起こった。その前は、私は「こんな本ができたらい</p>

	<p>いな」と思ってやっていたわけです。でも3・11を経たとき「これはもう、出さなければならない本になった」と背筋がのびました。それについて時間をかけてここでしゃべることはできませんけれど。子どもたちに向かって、いま大人が本気の球を投げなかったら、私たち人類の未来はない、くらいに思った。そのためには語りかけなければならないことがあるし、入れなければならないことがあるんだということを、社長に伝えたくて。子どもにとってこの本は剛速球だということは私にもわかっていました。10歳の子どものためにこの球は剛速球かもしれない。でも、私は思っているんですね。子どもというのは「あんたを信じて、いま本気でこの球を投げるからね」と言ったときに、彼らは絶対に逃げない。たとえその時に受けとめられなかったとしたら、「くやしい、いつか受けてやる」と、絶対に思う、子どもというのはそういう相手だと思っているんです。もし子どもを馬鹿にしたり見下したりしたら、子どもってかしこいのですから、ちゃんと子どものふりをしてくるんです。でも、本気でやるからねって言ったときは、もうスゴイ。子どもというのは私に言わせれば、みくびれない、おそろしい相手です。私は子どもに向かって本をつくるということは、遠い未来に向かって球を投げていることだと思って仕事をしてきました。だから本気の球は「部数」というかたちに現れるかどうかはわからないけれど、ちゃんと届くと思うんですね。</p>
生田部長	<p>本気の球を投げる。その本気の球って何ですかね。新刊の中にも将来のすばらしい本が当然含まれているわけですね、いろんな本が。温故知新ということが話の中ででてきました。今売ってことじゃなく、今だって売れなきゃ困るんだけど(笑)。将来に向けて本気の球を子どもたちに投げて、そして本気の球を受け取って育て子どもたちを長い目で育てることが大事。それをやってこなかった。あまりやっていない。なぜそういえるのかというと世田谷文学館では、毎年子どもたちに大人にすすめたい本という、読んで感動した本でぜひ大人に読んでもらいたい本を募集したら、みーんな漫画なのです。漫画なんですけどよく見ると、いい作品を子どもたちは必死で探そうとしています。多分、先生も、大人も、古典を読んでそれを真面目に、本物を投げるよって伝えてきてない。しんどいんですけど、長い目で育てるといって、姿勢、努力が必要だと思います。</p>
松田さん	<p>さっき濱野さんが「待つことができなくなった」っておっしゃってましたね。</p>
生田部長	<p>それがひとつ大事だなというふうに思います。それから批評と言ったら大袈裟だけれども、批評の不在。小林秀雄だとか、古いな(笑)。たとえば吉田秀和が批評していたら、必ずレコードを聴いたとか、そういう信頼できる羅針盤がないんだね、指針がね。10年間続きました、『この絵本が好き!』(平凡社)という絵本の書評誌が。本屋さんが主に選んでるので、そういう意味で</p>

	<p>はかたよりがもちろんあるんですよ。だけどその本が取り上げてるあいだは、ほんとにその本が売れました。それが読者に届くためには皆さんのような存在も必要なんですけど。やっぱり批評誌の存在も不足してるなと感じています。</p> <p>ここに図書館のかたに書いていただきました（P45 付録参照）。さっき言いましたが、「子ども読書活動推進」のためには、こんなことが大事なんじゃないかと僕が思ったんです。それぞれ皆さんがこれを見て、これが大事、あるいはここに書いてないけど、是非こんなことが大事じゃないかということ、一言ずつ順番におっしゃっていただけますか。これはあくまで例示です。じゃあ濱野さんから。</p>
濱野さん	<p>子どもの読書時間を毎日30分保障という事を書いてあるんですけど、別に文句を言う訳ではないのですが、もちろん子どもにもよると思いますけど、本を好きな子って好きなんですよ。時々児童書売り場とかうろうろしていて面白いですね。親の方がこっちにしなさいとか言うのを見たりする訳ですけど、全ての子どもに言える訳ではないですけど、私から言わせれば今の子どもはどうしても忙しすぎると思います。昔だったら本を読む風な事は良いという風に思われていたけれども、それよりももっと勉強とか、お稽古事とかそうになっているんじゃないかとちょっと気がかりですけど。ちょっと逆の話ですかね。</p> 
生田部長	<p>いやいや（笑）そうではなくて。保護者は読書を必ずしも勉強だと思ってないんです。「勉強しなさい！」の中に「本を読みなさい」は入ってない家庭が結構多いと私は思っています。それで本を読むという事は勉強そのもとは違うかもしれないけれども、勉強と同じように保障しなきゃだめだと思う。</p>
濱野さん	<p>私は本ばかり読んでいて、怒られたことがあります、先生に。高校受験の時。今、急に思い出しました（笑）。読む時間を確保するためには生活の中で時間を保障されなければいけないので、どう条件をつくるというか、環境づくりのほうが大切なのかなという事を思います。どういう環境をつくるかということだと思います。</p>
生田部長	<p>じゃあ、次は松田さん。</p>
松田さん	<p>難しいですね。どうすればどうなるということではないと思うんですけど。こういうことって。</p> <p>私は絵本作家を目指している人たちのワークショップということによく関わるんですけど。そういう時に絵本作家になりたいと言っている人が実はあ</p>

	<p>まり本を読んでいないということがよくある、びっくりする(笑)。これはあかんと思って、今年からあるワークショップで特別な時間を設けると決めました。なぜかという、たとえばボートを漕ぐ時ってオールを2本動かしますよね。オール2本でこぐから前に進むわけですけど。作ろうとする人たちののに、「読む」というオールを持っていなくて、「ワタシ、ワタシ」というオールしか動かしていない人がたくさんいる。「ワタシのことわかって。ワタシのことわかって」とだけ言って、他者に伝える方法についての冷静な判断や考えが足りない。一本しか漕がないので、同じ場所をぐるぐるまわっているだけでちっとも前に行かないんですよ。これではダメだと思って、時を経て残っている絵本を本気で読んでみるという時間をこれからもどうと思っているんですね。その本をそれぞれが本気で深読みしてみる。答えがひとつなわけじゃないから、自分自身という主語のある存在と、その絵本というものとの問答にもなる。これもさっきの「ねばならない」に繋がるんだけど、「よい本」を読めばいい子に育つという短絡的な理屈は、疑った方がいいと思いますね。そういうことを信じてちゃいけないんです。「かもね」ぐらいに受けとめていたらいいと思う。いい子になるかもかもね、ぐらいでそれを受け止めておく。悪い本を読んだ子は悪い子になるのかっていうと、そうとは限らない。だいたい悪い本ってなんだ?ということになる。そういうことではなくて、子どもの咀嚼力というのはすごいですからね……。子どもの本の場合は、大人が介在することがものすごく多い。だとしたら介在する大人自身が本気で、何かの本を好きだったり、いいなと思っていること。そういう事が、そこが重要。つまり大人自身が主語をもつということです。</p> <p>さっきの、「これは私の大事な本だからさわらないで」と言ったとき子どもの目の色が変わったように、私は子どもの読書時間を確保するというそういうことの前に、子どもと本の出会いを願うのであれば、まず自分が、手渡す人自身が、絵本なら絵本っていうものがどれほどすごい力を持っているのかを自分が味わってください、と思います。その気持ちは絶対に通じる。子どもに。</p>
生田部長	次は兼森さん。
兼森さん	<p>私も同じといたらあれなんですけど、例えば、『よりみちパン!セ』ってすごく流行りましたよね。あれって大人のビジネスマンに読まれている自己啓の子ども版だと思っているんですね。本屋がいうのも何なんですけど、自己啓なんて読む大人にはなって欲しくなくて(売れてますけど笑)自己啓、自己啓発本です。あれを読んでああいう風にしなきゃとか思うのは、支えにするのは大人はまあいいですけど。子どもたちには、絵本とか物語の世界を支えにしてほしいから。ただ何か『パン!セ』が出た意味の良さっていうのは</p>

	<p>あって。あの叶恭子さんの『知のジュエリー』っていう本がその中にあるんですけど、ほんとにすばらしいんですよ、おもしろかった。</p> <p>私は制服が嫌いです。みんな同じ制服を着て学校に通うことにすごく抵抗があります。という中学生の質問に恭子様が答えるんですけど。</p> <p>あなたがもし制服を変える為の革命を起こすぐらいの余力と体力があるんだったら、やっごらんない。でもそうでなくて、あなたの一番やらなきゃいけないことは義務教育のしかも勉強です。もしそれをおろそかにしてまでやる余力があるのならやっごらんない。そうでなきゃおとなしくしてって事ですよ。私ほんとにすばらしいなと思って。今の時代だからこそ出てきたそういうものを、ざくざく読んで、なんか抵抗力をつけて欲しいなという気持ちとかも本当にすごくあるし、それと同時にもちろん過去の名作とかロングセラーってほんとに大事だと思う。でもこうやって現在進行形で作家さんが本を出されていて、作家さんが本を書いている、編集者が本をつくっているというのは、そういう脈々と続いてきた日本児童文学史ですよ、そういうものをちゃんと受け継いで出てきたものにはいいものっていうものは新しいものでも絶対あるし、時代を反映して出て受け継がれているものもある。</p> <p>お母さんとかお父さんは本当にわからないんですよっていうんです。でもわからなかったら一緒に読んで欲しいと思うし。最近お父さんがよく来てくれるので、お父さんとしゃべることが多いんですけど、絶対お父さん、面白いから読んで下さいよ、っていうんですね。まず、子どもなんかにあげなくていいから自分が読んで面白かったらあげて下さいって言ってそれで「ヤモリ」なんかはすごい売れたんですね(笑)。ほんとです。子どもの頃に本なんか読まなかった方とか、私たぶん今の小学生のお父さんとかお母さんとか結構同い年位になってきちゃってね、どきどきしちゃうんですけど(笑)</p> <p>私たちが子どもの頃も、本を読まなくなってきているって言われてて、今の子どもたちも言われてて、なんだ、今も昔も言われてるじゃんみたいな。あまり関係ないんですよ、読む子はすごい読むし読まない子は全然読まないから。そんな中で豊かな時間をつくって欲しいと願うのであれば、やっぱり自分がすごく理解する事と面白いことを「面白かった、こんなの発見しちゃったよ」って、お父さん、お母さんから、「ねえどうどう？みてる？」みたいなそういう感覚でいいんじゃないかなと思います。そういう教育の大事さってのはあると思います。</p>
松田さん	<p>そういうときも主語をもって喋れば子どもは聞くとおもいます。これはいい本なんだからって言っても「誰が言ってるんだよ」になる。「私がだよ」って言うと、目をむけてくれる。</p>

<p>生田部長</p>	<p>それはすごく大事なことです。ただ今と4 - 50年前とでは日本の子どもをとりまく環境が随分変わってきているんです。本をそんなに読まなかったけど、みんなりっぱに育ったじゃないか。でもその当時はお手伝いをしたり外で遊んだりそういう機会がたくさんあったんですよ。</p> <p>今はボタンで済む時代になり、あるいはパソコンをいじったり、ゲームやビデオを観たり、という時間が非常に多くなってきている。本を読むってのは一方的に受け取るって事ではなくて、対話する、考えるという時間が持たなくなってきている。昔と今は同じではないので、今、本を読むことが子どもたちにとって大事だということも私は考えてもらいたいと思うんです。</p> <p>今日はここに子どもの本に携わる人がお見えになっているので、あまり時間もありませんけど、その次の点をちょっと一緒に考えてもらいたいと思うんです。一番上と一番下に書いてあることは私たちの事なんです。子どもたちに本を読んでもらいたいのですけど、でもそのためには大人が本を読む事。「私」っていうのはボランティアでもあるし先生でもあるし司書でもあるわけですが、先生も是非そうなってくださいと(笑)。数学の先生が授業の合間に実は面白い本があるんだよ、って今日松田さんがエピソードを話してくれたじゃないですか。数分でも本にまつわることが授業の合間にあったら、子どもたちは、え？先生そうだったの？それで先生になったの？って興味をもつじゃないですか。そういう機会を持っていてもらいたい。</p> <p>図書館の宣伝をしてるわけではないけれど、図書館に行く習慣をつけるという事はすごく大事だと思っているんです。返したら借りるじゃない、ただ返して終わらないから。月に1回でいいんだけど、お父さんお母さんと通う習慣があるといい。</p> <p>学校図書館の事も書いています。学校の中ですね。子どもたちは、地域図書館というよりは学校図書館で借りている。そこも必ずしも充分じゃない、図書館司書の問題、それから本もずいぶん古い。そういう点をみんなの力で少しずつ変えていかないといけない。</p> <p>作家の立場からどうですか。学校図書館については...</p>
<p>濱野さん</p>	<p>う～ん、あんまり機会がないんです。私としてはとても特に気になる所ですが。</p> <p>絵本の読み聞かせとかっていうのはまだまだ盛んなんですけど、ちょっと話がそれてしまいますが、これをどう読み物につないでいくっていうのが途切れてる感じがするんですよ、必ずしも年齢が高くなってからの読書体験に繋がってないような印象をもってまして、それこそ、中高生も忙しいっていうのがあるのかなーと思うんですけど、ごめんなさい、学校図書館の現場はよく知りません。ただ、私、さいたま市にいますけど、さいたま市は</p>

	割と充実しているらしいです。あの何年か前に司書教諭...
生田部長	配置を変えたっていうのがありますよね。
濱野さん	司書と司書教諭がいるって聞いて、その司書教諭の人たち向けの講演会というので話をしたことがあります。
生田部長	<p>司書と司書教諭がいて司書教諭というのは、先生の中から任命するのでお見えになると思うんですけど、問題は学校図書館司書。こちらが大事。いつもいて、そして情熱を持って取り組んでいただける事が大事です。今日配布した資料を見てください。司書の配置状況、それから司書教諭の配置の状況、小学校、中学校、高校ではどうか。それから朝読の状況はどうか。90何パーセントの学校ではやられているんですね。ただ週に何回か。読み聞かせ、ブックトーク様々やられています。</p> <p>読み聞かせは90何パーセントの小学校でやられています。それくらいどこでもおやりになっています。今仰ったように問題は、その後子ども自身が読むというところにどれくらい繋がっているかということなんです。</p> <p>でも中学、高校になるにしたがって読書量が急激に減っているのは多分ニュース、新聞をご覧になってご存知だと思いますけど。絵本をあんなに読んでもらっても急激に減るんです。中学、高校になると。読んでないという事ではないんですけど、とっても熱心に読んでも子どもたちとそうではない子の差が開いているというのも最近の特徴です。</p> <p>本に出会うのが、私も遅いんです。私は野球を中学でやってたんですが、すごいコンプレックスがあったんです。クラブ活動をしないうちはいつも勉強できるから、きつとたくさん小説を読んで、漱石も鴉外も堀辰雄もみんな読んでいるんだろうなと思った。これは何とかしないといけないと思って、週に1冊は買えないので月に1冊ずつ文庫を買って友達に見られるのは恥ずかしいから密かに読んでいた。</p> <p>本当に本を好きになって読むというのは中学、高校生、それが将来にまで影響を及ぼす出会いになるので、そこで読む機会がない、読んでないというのは問題です。</p> <p>どうですか？中学生たちは。兼森さん。</p>
兼森さん	<p>うちは大丈夫なので(笑) ほかの本屋さんについて見て欲しんですけど、絵本の売り場の半分以上を占めているところがおおよそだと思います。</p> <p>絵本、学習漫画、図鑑、読み物ほんのちょっと、それは数字です。売れ筋の。本屋さんを経営する上でたぶん、シェアの高いものをたぶん数字で上手に配置されているんでしょうけれども、私は思うんですが、やっぱり読み手は未来のお客様なのでやっぱり育ってくれないと困るので、うちも私が来るまではそうでした。テレビ絵本、絵本が半分以上で、読み物はほんとに五分</p>

	<p>のーあるかないかでしたね。これは困ったと思って大分増やしました。ヤングアダルトの書架もちろん児童書の中に作りましたし。子どもたちにはなかなかハードルが高くて文芸書のコーナーに行けなかったりして、読む子はいいですよ、勝手にやるから。そうじゃなくってそのきっかけを知らない子ども達に、提供の場を設けること。もちろん図書館さんで積極的にそういうフェアをやられたりとかも大事だと思いますし、中高生の読み手を育てるといのはすごい私も気になる所ではあります。</p>
生田部長	<p>中高生。どうしたらいいですかね。</p>
松田さん	<p>中高生は.....私自身も暴れていた時代でしたね(笑)生徒指導室に呼ばれたりしてたし。気持ちを素直に表には出さない。で、さっき「密かに」っていう話が出た、そこが結構ポイントかなと感じますね。密かに読んでたっておっしゃってたでしょ? 公に奨励されて、「さあ君たち、読みたまえ」って言われたら、私なんかはいやですね、やらないです。信頼関係があったうえで奨励されたら別だけど...</p>
生田部長	<p>そんな生徒ばかりじゃないかもしれない(笑)</p>
松田さん	<p>はい、もちろん、そんな子ばかりではないんです(笑)でも、逆らいたい子っているんですよ。大人の世話の仕方っていうか関わり方って非常に難しいと思うんです。</p> <p>余計なお世話が必要な時もあるけど、ほっといてよっていう時もありますよね。たとえば、絵本をやってると、「ともだち」という言葉が、もうなんか金科玉条で、「ともだち」ができたらずべてよしという空気がある。それが実はちょっとイヤで.....。大人って、たった一人で子どもがポツンといたりすると、すぐ心配するでしょ、すぐ「ともだちは?」とかって思う。たしかに気にかけてやる必要があるときもあるけれど、それとは別に、子どもが成長してる時、心が成長してる時って、実は「ひとり」でいた時じゃなかったかなと思ったりするんです。違いますかね? みなさんも自分が子どもの時を思い出したら、ともだちとキャキャやってる時ではなくて、たったひとりでポツンといた時に、いろんなことを考え悩み、そういう時に心が成長したんじゃないかなったろうかという気がするんです。</p> <p>大人はどうしても、子どもは明るく楽しく元気よくみたいなところを求めてしまって、子どもがそうしているところを見て安心するんですけど、そうではなくて、隠れてるとか密かにとか、ひとりでいるとか、そういう時も、それはそれでチャンスだと私は思っているくらいで、それがさっきの「待つ力」とも関係するんだと思うんです。その「待つ力」を私たち大人がは持てるかどうか。ふらつかずに待てるか。それは子どもにも伝わると思う。</p> <p>うちに遊びに来ていた子どもの中に、かなり問題を抱えた子って何人もい</p>

	<p>たんですけど、一人の女の子がいじめにあって学校行かなくなって、まあ、いろんなことがあって、家庭に問題があったんですけど、「今日、お父さんを殺します」なんていうメールを送ってきたことがある。「今日死にます」とかね。で、私は「明日にしましょう」という返事を出す。そのとき海外に居たもんですから、そのうちだんだん心配にもなってきた、時差もあるし寝不足が重なってきて、だんだん腹も立ってくるんですね。であるとき、「はい、わかりました、やっちゃってください」と書いた。「ただし、私はあんたのために一滴の涙も流す気はありません。一人で生きてると思ったら大間違いだ！」と書いたら「死なないもんねー」という返事が返ってきた（笑）。この子が20歳過ぎたときに、ぼろっとメールがきて「だいぶ大丈夫になりました、素子さんがあの時私の前から逃げなかったから」って。一言だけ書いてきました。なんとも言えなかったけど、そうか...と思いました。私としては逃げるも逃げないも、ただどうしようもなかっただけなんですけどね。できたことは「あなたのことを見ている」と伝えるだけ。それさえあれば大丈夫なのかもしれない.....。</p>
<p>生田部長</p>	<p>お約束したように、これからそれぞれ、今日お見えになった皆様へおすすめの本、あるいは、お子さんへおすすめの本を、順番に言っていて、この会を終わりにします。兼森さんからどうぞ。</p>
<p>兼森さん</p>	<p>私、本屋さんなので、いっぱいあるんですけど、まず、濱野さんの、ぜったいに読んで欲しいのが、『石を抱くエイリアン』（偕成社）っていう、先ほどから濱野さんが、お話のなかで、何度も「リアル」と「希望」という言葉があって、3.11のことが関わってくる本ですが、私も3日前にもう一度読もうと思って、うっかりお風呂の中で読んでしまったのですが、お風呂の中で読むじゃなかったと思って（笑）。すごく、濱野さんらしい、テンポのいい小説ですが、そこに描かれている痛みとか、あと、子どもたちが知らないといけない事実っていうのは、これからぜったいに大事になってくる。隠し立てするだけでなく、子どもたちは、すごくいろんなものを知る権利があると思っているので、今の濱野さんの作品の中で、私が言うのもあれですが、私の中で『石を抱くエイリアン』が私の中でマックスなので、これを読んでほしいというのと、あと、松田さんのさっきから何度も言っている『ヤモリの指から不思議なテープ』ですが、ヤモリには、ほんとに明日役に立つすべての知識が詰まっ</p>



	<p>ています。</p> <p>「イナックスのよごれないタイル」ってありますよね。あのタイルは、カタツムリの殻が汚れないってところから来ているんですけど、そういうのを逐一松田さんが、言ってくるのですよ。「おもしろいでしょ。」と。そういう風に描かれているんですよ。だから、けっこう科学的には難しいことも書いてあるんですけど、すごく興味もてる本で、それこそ、お父さんかなんかがこれ読んで、「お前知ってる？」みたいな風に、家族の会話も、食卓で話してほしいなと思っています。あと、私絶対読んでほしいと思っているのが、お父さんもお母さんも子どもも読んでほしいのですが、今、2巻まで出ている『タイムライダーズ』という、小学館から出ている、アレックス・スカロウさんという人の本で、金原瑞人さんが訳をしていますが、タイムトラベルができるようになって、そうすると時空を変えようとする悪いやつらが出てくるわけですよね。それに対して、時空警官みたいな「タイムライダーズ」って呼ばれる子どもたちが選ばれるのですが、その選んでくる子たちというのが、「どっかの時代で死にかけている人たち」で、ひとりは、タイタニックに乗っているアイルランド人の17歳の男の子だったり、あとは、2000年代にアメリカで暮らしているプログラミングが得意な女の子だったり、あとは、もうちょっと先で、ムンバイに住んでいる女の子。で、みんなそれぞれ、飛行機事故やタイタニック沈むとか、そういうので、「おまえ、死ぬか来るかどっちか」みたいなのを、時間の番人みたいなおじいちゃんに声かけられて、「わかんないけど行く。」みたいな感じで集まります。集まった場所は、2001年の9.11ですね、その日に集められて、9.10と9.11の2日間を繰り返し、ずっと見続けるんですよ。それこそ、アメリカ人の女の子は、ここでテロが起こることがわかっているわけです。それで、その暗い2日間を見続けて、「あっ！変わっている！」と思ったら、時空を飛んで修正しに入るんですけど、ここで面白いのは、未来がよくないっていうのを知っているんですよ。もう、ニューヨークも荒廃してて、世界も汚染されててあまり良くない、でも、その悪いやつらを変えた未来もまた良くないんですよ。私利私欲に溢れているので。整える未来も明るくないのに、じゃあなんで、時空の歪みを直すのか、っていうところが、未来は暗いんだけど、でも、今一生を精一杯生きることで、もしかしたら、私たちの生きる意味とか変わってくるんじゃないかっていうところが、今書かれていて、まだ続刊中で、エンターテイメントとしてもすごく面白いんですけど、考えさせられるところがあるので、ほんとに、読んでください。</p>
生田部長	熱く語っていただきました。松田さんお願いします。
松田さん	『ヤモリの指から不思議なテープ』を作った理由の一つは、自然は優しいか

ら、美しいから人を癒すとか、そんなこと言っていてダメなんじゃないかと思っていたからなんです。ではなくて、自然は先生であるという考え方ですよね。センス・オブ・ワンダー、あたりまえのことをあたりまえだと思わない力、それがすごく大事だと思って、この本を作ったんですね。それを伝えたい。さっきから、「本を、本を」と私たちは言っていますが、ふと思いました。今から紹介するまどさんの本ですけれども、そのまどさんがこうおっしゃったことがあります。「ぼくはね、本が読めないんですよ。本を読んでいると頭が痛くなる」っておっしゃって（笑）で、その後、「だから、ぼくは、石やコップを読むようにしてきたんです。そういうものも全部、ぼくにとっては本なんです。」と。石やコップや葉っぱが言っていることを、心から聞くようにした。それが、私にとっての本でしたとおっしゃるんです。それはさっき言った、本を読むことだけが大事なんじゃない、ということとも繋がってくるわけですけどー。で、ここにある『まどさんからの手紙 こどもたちへ』（講談社）という本です。これは去年の3月に出しました。これはいまから20年前にまどさんが母校の小学校へ送られた手紙です。その年、国際アンデルセン賞作家賞を日本人で初めてとられた年に、おそらく子どもたちから何かのお祝いが届いて、それに対するお礼の手紙だったようなんですけど、それを私は、ある偶然で、目にしました。母校のまどさんコーナーに、コピーでしたけれど養生テープで貼ってありました。20年もそこにあると、それがどれだけ大事なものなのかって、だんだん思わなくなりますよね。私は初めてそれを見たので、なんだろうと思って、その場でずーっと読んで、びっくりしちゃって、「校長先生、これ、こんなところに、養生テープで貼っている場合じゃないと思うんですけど（笑）」って言った。そのときはただ驚いたんですけど、それを後日、他の編集者に話したときに、講談社の編集者が、「松田さん、それ、本にならない？」って身を乗り出してきて、私もハツとして、「確かに」と思ってまどさんに伝えたら、まどさんは私の方は見ずに、ふっと遠いところに目をやってから、ゆっくりうなずかれて、「うれしいことです。」って一言だけおっしゃったんです。忘れられないですね。で、私もすぐに作ればよかったのに、実家の母が亡くなったり、いろいろ個人的な事情もありで、ズルズルズルズルと遅れ、そして、初稿といって印刷所によく入れて、その、最初の校正刷りが出てきたその日に、まどさんの訃報が届いてしまった。間に合わなかったんです。お通夜へ行き、棺におられるまどさんに「本当に申し訳ありませんでした。」って謝って、その帰りがけでした、うれしい電話がかかってきました。仙台からでした。2012年に、私は、仙台の名取市閑上地区の子どもたちや家族に会っているんです。宮沢賢治をテーマにしたイベントで、その実は仮設住宅におられる方たちに少しでもゆっく

りしてもらおうというのが目的の会だったんですけど、そのときに、あれだけの悲惨な津波の光景を目の当たりにした子どもたちの前で、私など何も言えるわけもないと思ったので、こういうものを作って持っていったんです。賢治の言葉の中から、私の背中を押してくれている言葉を、いっぱいいろいろ打ちこんで、出力して入れたファイルです。賢治は私にとってずっと「お前は何をしているんだ」と問い続ける作家なもんですから。で、その中に、特別に、賢治とは関係のない、この紙を一枚入れたんです。それが実は、まどさんからの手紙。そのときはまだ本になっていなかったの、文面を打ちこんだ紙を一枚入れたんです。まどさんのお通夜からの帰りの電話は、そのときのイベントを企画した人からで、まどさんが亡くなったことはニュースで流れたので、子どもたちも知るわけですよ。それで電話の人が言うんです、「おまえさあ、2年前に、子どもたちに、まどさんの手紙を渡しただろ？ 今日なあ、そのうちのひとりの子が、それを持ってきたんだ」って言うから、「えっ」って言ったら、「その子が これね、わたしの宝物なんだよ っていう」んですって。仮設にいる子なんですけど、「友達とけんかしたり、いろんなことがあったとき、なんどもなんどもこれを読んでたんだ。だから宝物なんだよ っていう、持ってきたんだ。」って言われて、ほんとに私は、ありがたかった……。その子を通して、まどさんからもう一度「この本を作ってもいいですよ」って言ってもらえたような気がしました。

で、もう一つ、ついでですが、私はこの賢治の言葉を入れたファイルの中に『雨ニモマケズ』を入れなかったんです。入れないけど、ここに貼ってあるこの2行ですね、これは『雨ニモマケズ』の最後の2行です。どうしてそれだけ貼ったのかってことだけ、子どもたちの前で話せたんですけど、私は、実は「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」というあの言葉を、みんなが朗読して覚える必要があるとは思っていないんです。そのことを言ったんですね。それは、なぜかと言えば、賢治さんは最後に「ソウイウモノニ ワタシハナリタイ」と書いている。だからそれは賢治さんがなりたかった者。そう思うと、私たちに託されているのは、最後の2行の前を、それぞれが自分で書くことなんじゃないかと、私は思うんです。一人一人が自分で「ソウイウモノニ ワタシハナリタイ」という願いを書くことなんではないかって思っている、ということをお話しました。そういうものに私はなりたいて思いながら生きていくのとそうでないのは、大きく違うと思うんです。そう言って、このファイルを渡したんですね。

まどさんは、この手紙を読むと、相手が幼いからといって上から目線は一切ない。まっすぐな球を、本当にまっすぐな球を投げています。大人にはもう、この世界を変えられない。私も頑張るけれどもできないかもしれない。

	<p>どうか君たちには、やってほしいという願いが真剣に込められている。そして、そうしてくれることを、「地球がねがっている。宇宙がそうねがっている」といったほうがいいかもしれません」とまで書いています。こういうことを書ける人は、ほとんどいないですよ。私も書けません。これを本にしたときに、手紙が保管されていた学校の子どもたちのところに報告とお礼に行きたんです。「君たちの宝物を、全国の人たちに分けてくれてありがとう」って。そのとき子どもが何と言ったか……。すごいですよ。「僕たち、期待されているんですね」「任せてください」と言った。子どもたち、かっこいいです。だから、彼らを未熟な者と見すぎて、「教えなくては」とか「教育しなくては」とか、そういうことに躍起になる前に、大人だって迷うし、傷つくでしょ。そういうことも認めて、含めて、本気で彼らに球を投げたり、しゃべりかければ、彼らは本気で耳を傾けるし、「よっしゃ！ 任せて」となるんじゃないかと思うんです。基本はそこにあるので、そういう形で、子どもの本のことを常に考えていきたいなと思っているんです。ということなので、子どもに対してというだけでなく、大人が本を好きになって読んでいただきたいです。</p>
生田部長	<p>ありがとうございました。では濱野さん。</p>
濱野さん	<p>私、あんまり熱く語ることがなくて。リアル子どもと接点がないので、自分が書くときは、自分の中の子どもを引き出すという感じです。一冊と言われてとても困って、どうしようかなと思ったんですけど、たまたま最近関わった本からってことで。子どもにオススメしたいのは、友人なんですけど、菅野雪虫さんの、『天山の巫女ソニン』（講談社）、全5巻とあと外伝2冊あるんですけど、今、文庫版の4巻目の解説を書くこととなったので読みなおしていて、びっくりしたのは、彼女、南相馬出身なんですけど、4巻目が出たのが2008年なんですね。それなのに、一瞬、3.11の後に書いたのかしらと思うような感じがして、ぜひお子さんに読んでほしいなと思います。それで、大人向けの方ですが、たまたま自分が最近読んでとっても面白かった、多和田葉子さんの『献灯使』（講談社）読まれた方いるかな。「けんとうし」って言っても、唐代に行く「遣唐使」ではなくて、貢献の「献」に、「灯り」、これで「献灯使」って書くんですけど、とーっても面白かったです。どう面白いかは、ご自分でっていうことで（笑）。以上でよろしいでしょうか。</p>
生田部長	<p>ありがとうございました。私も1冊だけ。『センス・オブ・ワンダー』（新潮社）っていう本を皆様は読まれていますか。レイチェル・カーソンの。本が大事だけでも、本以上に大事なことがあるんだっていうことも知ってもらいたい。同時に。それから、詩を読んでいただきたいって思っています。『ポケット詩集』っていうアンソロジーが童話屋から出ています。詩を読むということを、あらゆる読書の核になる部分として、子どもたちと読んでもらい</p>

	<p>たいと思っています。</p> <p>今日は、寒い中をたくさん来ていただいて、ありがとうございました。みなさんの力で、子どもたちもきっと良い本と出会うと思いますが、みなさん自身も、素敵な本と出会ってください。今日は、素敵なゲストをお迎えして、とても楽しかったです。ありがとうございました。(拍手)</p>
(総合司会)	<p>どうもありがとうございました。残念ながら時間となりましたので、以上をもちまして、第9回世田谷区子ども読書活動推進フォーラムを終了いたします。なお、受付時に配布いたしましたアンケートにつきまして、受付にて回収をいたしますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。本日は、ご参加いただきましてまことにありがとうございました。</p>
生田部長	<p>アンケート(講師への質問)を書いた人、お答えしますので、ここに集まってもらっていますか。</p>
(総合司会)	<p>講師の先生への質問がありましたら、どうぞ個別に。では、ここでひとまず、4人の方に拍手をお願いしたいと思います。(拍手)</p>
生田部長	<p>どうも、ありがとうございました。</p>
濱野さん	<p>低年齢の作品、幼年童話を発表するお考えがないかという質問をいただきました。ときどき、編集の方から、そういうお声をいただくのですが、なかなか難しく、中長期の課題となっております。それから、アーサー・ピナードさんの言葉について、絵本を贈るのは無難なだけではないというお考えをいただきましたけど、それはもちろん当然のことだと思います。もちろん、アーサーさんもそのこと自体を否定したわけではありませんし、私も、そういう風に否定する気もちではぜんぜんありません。ということでよろしいでしょうか。</p>
松田さん	<p>「今につながると思える思い出はありますか」という質問に対してーですが……。特別な思い出が1つあります。石森延男さんという作家がいらしたんですが、小学校4年生のときに、いろいろな縁で石森さんに会ったことがあるんです。大人も一緒に石森さんのお家に行ったんですが、そのとき、石森さんが、子どもの私をじっとまっすぐ見て、前に座られて、そして、庭を指して、「あそこにね、いろんな鳥が来るんですよ。ほら、いろんな植物も生えているでしょ」とおっしゃって。そのときに、「あなたは、あれを、どのように書いても良いんだ、そのためにはじっと、よく見なさい」と言われたんです。そして、色紙に言葉を書いてくださいました。当時私は、その言葉の意味を深くわかっていませんでした。10歳でしたから。その言葉は「見ることは考えること」という言葉だった。その言葉が、いまは座右の銘のひとつになっていて、これは、おそらく、私の芯を作っていると思います。</p> <p>次の質問は「小5の息子が最近、何で生きているのだろうか考える」と、</p>

ふと言い驚きました。普段は元気になっている、普通にしています。何か彼に本を紹介するとしたら、何が良いのでしょうか」――。う～ん、何がいいでしょうかね（笑）。これはさっきも言った私の経験からで言うと、「答えなんてない」ってことになるんですが（笑）。考えながら生きていくんだと思います。だから、すぐわかるとかわからなきゃいけないってことじゃなくて、わからないことがあるってすごい素敵なことだよっていうことを、いっしょに共有してあげたらどうでしょうか。と、いま思いました。

次は「多感な時期の子どもが、読むのにふさわしい本を大人から渡して、素直に受け取ってもらえそうな方法などありましたらお願いします」という質問です。――いま、まさに多感だった時期の自分を思い出しているんですが……。中2のときの国語の先生が、私にとっては恩人だったなあと思います。というのは、1年のときの国語の先生は子どもを導こう修正しようという態度が強くて、それを感じている私としては反発をされていて、いやな生徒だった。先生が、大人が求めている答えっておおよそわかりますよね、子どもってね。でも、たとえば、詩を読んで、その詩についての感想を問われたとき、先生が求めていることと微妙にずれたことを言うと、先生は「あのね」って直そうとする。それが、私、ものすごく嫌で、より反抗的になってたところに、中2の先生が、この先生は私に対してだけではなくて、すべての子に対してなんです、いっさいの修正をかけない人だった。私たち生徒が感想を言うと、「へええ」とか「なるほどなあ」しか言わないんですよ。ちょっとびっくりしましたね。こんな大人もいるのかと思って。その先生が私のことを生徒指導室に呼んだことがある。そのとき一冊の本を渡されました。『道子の朝』（当時：盛光社、現在：偕成社）という砂田弘さんの作品です。それを渡されて「読んでみない？」って言われたんですよ。先生のこと嫌いじゃないから、素直に読んだ。で、「どうだった？」って聞かれました。そのときに、「私にはわかりません」って言っちゃった。何でかっていうと、癌になっちゃったお母さんのことを家族がみんなで見守っていて、それを伝えるかどうか、告知するかどうか、迷っているという話だったと思うんですけど、その中に、「人の命ほど大事なものは無い」という文章があったんですよ。それに対して私は反抗しているんですね（笑）。「何で人間なんですか。蟻はどうなんですか。猫はどうなるんですか？」ってそういうことを言う、ね、14歳ころの子どもは。言うんですよ。本当に、その反抗、そのとき先生は、「そうだなあ」としか言わなかった。それだけで、何も修正されなかった。……これから「道徳」という教科が始まる。それがどうなるのか知りませんが、大人からすぐに修正されないことで、子どもは迷う、考える、その言葉は自分に戻ってきて、自問自答を続けるんですね。それがすごく大事な

	<p>と私は思っているので、できれば、こういう風に、子どもたちに問いも本も渡してほしいなと思います。</p> <p>では次です。「祖父母世代として、幼児に読み聞かせを月1回たまにしていますが、新しい本は敬遠していました。昔からの古典の絵本が中心ですが、注意・留意すべき点はなんでしょうか。――ありません（笑）。注意・留意なんて心配されすぎることはないと思います。その方が好きなら良いんじゃないですか。実は、日本ほど、本を見ることにおいて恵まれた国は世界中にない。日本ほど、世界中の本が書店に並んでいる国はどこにもありません。私たちはものすごく恵まれているんです。だから、そこで出会ったら、それは縁ですから、古かろうが新しかろうが縁ですから、「これ見つけた！」って、で、自分のおばあちゃんが読んでくれた、そのことも、その子にとってのかけがえのないことで、誰が読んでくれたのか、誰が教えてくれたのか、そういうこと全部を受け取っていく。さっき兼森さんが、「売り場はいろいろ考える」って言ってたけど、私たちも本を買っていくときに、本だけ買っているんじゃないってことがあります。その本が、本が置かれていた場所のその、まとっている空気ごと買っているときがありますよね。だから、私たち一生懸命考えて作っているつもりなんだけど、だけどたとえば書店で、図書館で、どういう光をあてて、どんなスポットライト当ててくれるかが大事。出会いの縁を演出してくれる人や本屋さんの役割、大きいです。</p>
兼森さん	<p>「どういうきっかけで本屋さんに勤めることになったのか教えていただけたらうれしいです」という質問です。たまたまです。学生時代から、本屋さんでバイトをしていて、いろんなことを辞めていきましたが、続いていたのが本屋さんただけです。以上です。</p> <p>あと、これ皆さんに来ているのですが、「大人が子に本を与える基準は、大人の価値基準で良いと思われませんか。私自身は自信がもてないので、20年以上親しまれている本を選びがちで、新しい本を敬遠しがちです。」とのことです。さっきからみなさん話しているので、総括として、読んで面白かったよ、って共有することが大事なかなと思います。</p>
松田さん	<p>「読書感想文コンクール」ってあるじゃないですか。あれはいまや弊害もある。「本を読むと感想を聞かれちゃうんじゃないか」という恐れ、子どもにとっては。さっき、「一冊の本屋さんがあって、なんとかして売らなきゃいけないんだよ。」って言って兼森さんが言ったのが面白いんだけど、そういうときに、感想文ではなくて、本に帯についているじゃない。たとえば子どもたちに、「感想文書かなくて良いから、どこがオススメなのか、おすすめの言葉を書いた帯を作ってくれる？」って言ったら、結構乗るかも。</p>
兼森さん	<p>補足で、なるべく見てほしいんですけど、うちの店で、青い鳥文庫35周年</p>

	<p>記念を祝して、各社の文庫もちょっとまぜつつ、文庫、児童文庫、自分で買う文庫として大事だと思うのですね。ラノベぽくなって、荒れてきているところもあるんですけど、やっぱり、児童文学であるべきと思っているので、もう一回見直す意味もこめて児童文庫のフェアやるんですけど、そのときに青い鳥文庫では、青い鳥文庫編集部の子どもたち版があって、子どもたちがいろいろ活動しているんですよ。で、その子たちに、選書をお願いしているので、今の子どもたちの意識とか、見えたりするとおもしろいかなと思います。宣伝です(笑)。</p>
松田さん	<p>もう一冊だけいいですか。ここには、本の読みきかせなどをしている方が多いと思うので、たまたま読んだ漫画にね、すごいのがあったんですよ。『花もて語れ』(小学館)っていう漫画で、これ、朗読のことを描いた漫画なんですね。正直びっくりしました。その中で、『やまなし』を、宮沢賢治の『やまなし』を女の子が朗読するんです。「クランボンはわらったよ。かぶかぶわらったよ」っていう風にサワガニの兄弟が会話をしている。その括弧に、どっちがお兄ちゃんのカニが言ったのか、どっちが弟のカニが言ったのかって、すぐにはわからない。でもね、その漫画を読むと、明確にわかってきます。朗読する、読むっていうことで、その本が、物語が、ありありとリアルに立ち上がっていく。見事な漫画だと私は思いました。衝撃的です。</p>
生田部長	<p>以上で、ほんとに終わります。(拍手)どうもありがとうございました。これ以上やるとね(笑)。ご家族から叱られるから帰ってください。お疲れ様でした。</p>
(総合司会)	<p>ではアンケートを受付の方で回収いたしますので、ご協力よろしくお願いたします。お忘れ物のないようにお気をつけてお帰りください。</p>

付録 第2部意見交換会資料

これは、子ども読書活動を考える熟議(平成24年12月1日)をコーディネーターの生田部長がアレンジしたもので、フォーラム会場のホワイトボードに板書したものです。

子どもと本の素敵な(幸せな、楽しい)出会いのためのアイデア(例)

～わたしにできること、みんなにできること

- ・大人(わたし、ボランティア、先生、司書...)の10分間読書を!
- ・子どもの読書時間毎日30分間の保障を!
- ・図書館(地域図書館、学校図書館)に行く習慣を!
- ・学校図書館に専従を!
- ・子どもの本のスペシャリスト(学校図書館司書、読書アドバイザー...)の適切な育成と配置を!
- ・中高生が本を好きになる方策(ブックトーク、読書甲子園...)を!